

農作物病虫害等防除指針
【 別 冊 】

(令和7年)

愛 媛 県

利用上の注意事項

- 本指針に掲載した農薬は、原則として令和6年12月11日現在で登録のある農薬を総括的にまとめたものであるが、農薬は登録内容の変更や、同じ成分であっても銘柄（製造メーカー）により登録内容が異なる場合等があるため、**農薬の使用にあたっては、農薬ラベルの表示事項（使用方法、注意事項等）を必ず確認し、使用すること。**（下記HP等を参照し、常に最新の情報を確認するとともに、変更があった場合は、必ず当該農薬のラベルを貼り替えてから、ラベルどおりに散布するよう指導すること。）
- 農薬の使用回数は、種子や苗における使用も回数にカウントされる（果樹等の永年性作物を除く）ため、種子や苗の購入元に農薬の使用履歴を確認すること。
- 本指針に記載してある農薬の使用回数は当該製剤で使用できる回数であるため、各成分の総使用回数が使用基準を超えないよう農薬ラベルでよく確認すること。
- 農薬取締法では、適用作物についてグループ化や分離登録等がされているため、「農薬登録における適用作物名について」（本冊P.16）を必ず確認すること。
- 薬剤防除法の欄に記載した時期は、あくまで目安として示したものであり、農薬ラベルに記載されている使用時期（収穫前日数等）を必ず遵守すること。
- 合成ピレスロイド剤、BT剤、IGR剤、その他水産動植物に影響を及ぼす農薬等を使用する場合、蚕や水産動植物への影響を考慮し、安全使用に努めること。

○農林水産省のホームページ「農薬登録情報提供システム」

最新の農薬登録情報（アドレス <https://pesticide.maff.go.jp/>）

○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

農薬行政に関する最新情報

（アドレス <https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>）

○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」県内における農薬の適正使用への取り組み等

（アドレス <https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html>）

○病虫害防除所ホームページ

病虫害発生予察情報等

（アドレス <https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>）

目 次

※基本方針、薬剤系統略号一覧表、農薬適正使用・危害防止対策、果樹病虫害防除時期、
薬剤の注意事項一覧については、本冊を参照すること。

I 作物別病虫害防除指針

1 果 樹

(1) 果樹病虫害防除法	2
[1] いちじく	2
[2] すもも	4

2 野 菜

(1) 野菜の病虫害防除法	8
[1] メロン	8
[2] ミニトマト	13
[3] 甘長とうがらし	23
[4] ししとう	27
[5] カリフラワー	30
[6] 非結球レタス	33
[7] ごぼう	39
[8] やまのいも	40
[9] 実えんどう	43
[10] しょうが	46
[11] しそ	47
[12] チンゲンサイ	49
[13] オクラ	53
[14] しゅんぎく	55
[15] こまつな	57
[16] なばな類	59
[17] みずな	61
[18] かぶ	63

1 果 樹

(1) 果樹病虫害防除法

[1] いちじく

いちじく

病虫害名	病虫害の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤								注意事項				
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数		人 毒	水産 (注)		
黒かび病	(発生の特徴) ○熟期に雨が多くと多発しやすい。	○発病果は早期に除去。 ○収穫は晴天日に行う。	収穫前		1 M5	トップジンM水和剤 ダコニール1000	1:チオファネートメチル 1:TPN	1,500倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	5回以内 2回以内	普 普	△ ×	○薬剤選択注意		
疫病	(発生の特徴) ○曇雨天が多いと多発しやすい。 ○葉の発病が多いと果実に多発。	○通風、採光、排水を良くする。 ○菌は土壌中に生存するので、マルチ等で水滴の跳ね上がりを防止。 ○病枝は切り取り、病果、病葉を早期に除去。	6月 〜 9月		11 21 21 40 M5	アミスター10フロアブル ランマンフロアブル ライメイフロアブル レーバスフロアブル ダコニール1000	1:アゾキシストロピン 1:シアゾファミド 1:アミスプロム 1:マンシプロバド 1:TPN	1,000倍 2,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	△ △ △ ○ ×			
そうか病	(防除上のポイント) ○発病前散布に重点を置く。	○発病葉や発病果は早期に除去。 ○密植を避け、通風、採光を良くする。	5月		M9	デランフロアブル	1:シチアン	1,000倍	収穫75日前まで	3回以内	劇	×	○かぶれ注意		
			5月 〜 7月		1 3 11	トップジンM水和剤 トリフミン水和剤 アミスター10フロアブル	1:チオファネートメチル 1:トリフルミゾール 1:アゾキシストロピン	1,500倍 2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	5回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ △	○薬剤選択注意		
			5月 〜 10月		1 1 3 M1	トップジンM水和剤 ベンレート水和剤 トリフミン水和剤 ICボルドー66D ※ICボルドー66Dは株元灌注。定植一年目の苗木には使用不可(葉害)	1:チオファネートメチル 1:ベノミル 1:トリフルミゾール 1:塩基性硫酸銅	500倍 1,000倍 500倍 2倍	収穫前日まで 収穫30日前まで 収穫前日まで -	6回以内 5回以内 4回以内 -	普 普 普 普	△ △ △ △	○薬剤選択注意 ○薬剤選択注意 ○株元灌注、1〜10ℓ/株		
さび病		○落葉は冬期に集め処分。	8月 〜 9月		3 3 7 11 M5	アンビルフロアブル ラリー水和剤 フルーツセイバー アミスター10フロアブル ダコニール1000	1:ヘキサコナゾール 1:ミクロブタニル 1:ペンチオピラト 1:アゾキシストロピン 1:TPN	1,000倍 2,000倍 1,500倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 4回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	○ ○ ○ △ ×	○耐性菌注意		
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見し、薬剤は、発病根除去後に処理。 ○新植の際、前作物の発病の有無に注意。	(耕種的防除法) ○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。	○前作の被害根を除去。 ○無病苗の植え付け。											○かぶれ注意(10日間入園禁止)	
			発病初期		29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	500倍	収穫30日前まで	1回					普
ネコブセンチュウ		○無寄生苗を用いる。 ○野菜跡地等発生前歴のある圃場には植付しない。	生育期(5月、10月)												○樹冠下処理
				1B		ネマトリンエース粒剤	1:ホスチアゼート	20kg/10a	収穫60日前まで	1回	普	○			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤									注意事項	
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒		水産 (注)
カミキリムシ類		○6月～9月に成虫を捕殺。 ○虫糞が出ている場所を 目標に幼虫を捕殺。 ○新梢基部に産卵された 卵を叩き潰す(クワカミキ リ)。	6月中旬～8月中旬										
クワカミキリ			8 9月 5	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○合ビレ(本冊P.15)参照。 ○合ビレ(本冊P.15)参照。
キボシカミキリ				3A		園芸用キンチョールE	1:ベルトリン		収穫前日まで	2回以内	普	○	
			3A		ロビンフッド	1:フェンプロパトリン		収穫前日まで	5回以内	普	○		
			6月中旬～8月中旬										
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタムプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
アザミウマ類	(発生の特徴) ○果口が開く時期に、果実 に侵入。	○園内部及び周辺を除草。 ○光反射マルチの使用。	6 中 旬 ～ 7 月	3A		アディオン乳剤	1:ベルトリン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○合ビレ(本冊P.15)参照。 ○合ビレ(本冊P.15)参照。
				3A		スカウトフロアブル	1:トラロトリン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタムプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクトラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	5,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				5		ディアナWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ゼリゲートWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:シクラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサタミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ハダニ類		○園内部及び周辺を除草。	発 生 初 期	6 10B 20D 25A 25A 25B		コロマイト乳剤 パロックフロアブル マイトコーネフロアブル ダニサラバフロアブル スターマイトフロアブル ダニコングフロアブル	1:ミルベメクチン 1:エトキサザール 1:ピフェナゼート 1:シフルトフェン 1:シエンピラフェン 1:ピフルプロトミド	1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 1回 1回 2回以内 1回 1回	普 普 普 普 普 普	△※ △ △ △ △ △	
モイチジクビクダニ	(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。		4月～6月(発生初期)										
				21A		サンマイト水和剤	1:ピリダヘン	1,500倍	収穫45日前まで	1回	劇	×	○刺激(眼) ○刺激(眼) 回数注意(アプロード [®] エース)
				21A		ピラニカ水和剤	1:アブフェンピラト	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	△※	
				21A		ダニトロンフロアブル	1:フェンピロキシメート	2,000倍	収穫3日前まで	1回	普	×	
カブリコナムシ	(防除上のポイント) ○第1世代幼虫を重点的に 防除。 ○多発時には、1回目散布 20日後に追加散布。	○5月～8月に幹や枝で寄 生が多いときは、タワシな どで駆除。	6月中旬～7月上旬										
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタムプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○回数注意(アプロード [®] 、ダニトロン)
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				16		アプロードフロアブル	1:アプロフェジン	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:フェンピロキシメート2:アプロフェジン	1,000倍	収穫14日前まで	1回	普	×	
			8月										
ヒトリジモドキ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○若齢幼虫が集団寄生し ている葉を切除。	6 月 ～ 10 月	3A 4A 11A 11A		アディオン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 デルフィン顆粒水和剤 ファイブスター顆粒水和剤	1:ベルトリン 1:アセタムプリド 1:BT(生菌) 1:BT(生菌)	3,000倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 発生初期但し収穫前日まで 発生初期但し収穫前日まで	2回以内 3回以内 — —	普 劇 — —	△ △ ○ ○	○合ビレ(本冊P.15)参照。 ○登録はケムシ類 ○登録はケムシ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤									注意事項
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	
ふくろみ病	(防除上のポイント) ○散布ムラのないよう、丁寧に散布。	○発病果の除去。	3月(萌芽前)									○薬剤選択注意
				M1 M3+1 M3 M3	ムッシュボルドーDF ホーマイコート チオノックフロアブル トレノックスフロアブル	1:塩基性硫酸銅 1:チウラム2:チオファネートメチル 1:チウラム 1:チウラム	500倍 50~100倍 500倍 500倍	葉芽発芽前まで 休眠期 収穫14日前まで 収穫14日前まで	— 1回 3回以内 3回以内	普 普 普 普	△ × × ×	
黒斑病	(発生の特徴) ○サンタローザ、メスレーは発生が多いので注意。 (防除上のポイント) ○多発園では、展葉期から10日おきに2~4回散布。	○越冬病斑を形成している枝は除去。 ○防風垣などで強風を防ぐ。	休眠期									
				M1 M1	ICボルドー412 Zボルドー	1:塩基性硫酸銅 1:塩基性硫酸銅	30倍 500倍	— 休眠期	— —	普 普	× ×	
			4月中旬~(落弁後)5月中旬									
				25 25 31 41 41+25	アグレプト水和剤 マイシン20水和剤 スターナ水和剤 マイコシールド アグリマイシン-100	1:ストレプトマイシン硫酸塩 1:ストレプトマイシン硫酸塩 1:オキシトリニク酸 1:オキシテトラサイクリン 1:オキシテトラサイクリン2:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 1,500倍	収穫30日前まで 収穫30日前まで 収穫7日前まで 収穫21日前まで 収穫30日前まで	2回以内 2回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普 普	△ △ △ △ △	
			収穫後									
	M1	ICボルドー412	1:塩基性硫酸銅	30倍	—	—	普	×				
灰星病	(防除上のポイント) ○落弁後防除を徹底。 ○収穫20日前からの防除を重点防除期間とし、7日間隔で2回防除。	○発病した新梢は除去。 ○樹上及び地上の発病果は早めに園外へ除去。	(3月満開直後~4月落弁後)									○登録は小粒核果類
				2 2 3 3 3 3 7 7 11	スミレックス水和剤 ロブラール水和剤 アンビルフロアブル オンリーワンフロアブル スコア顆粒水和剤 インダーフロアブル パレード15フロアブル フルーツセイバー アミスター10フロアブル	1:プロシドリン 1:イプロシオン 1:ヘキサコナゾール 1:テブコナゾール 1:シフェノコナゾール 1:フェンコナゾール 1:ピラジフルミド 1:ベンチオピラト 1:アゾキシストロビン	1,500倍 1,500倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍 5,000倍 3,000倍 1,500倍 1,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 3回以内 2回以内 3回以内 2回以内 4回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 普 普	△ △ ○ △ ○ ○ ○ ○ △	
			5月7月上旬									
				11+7 17 M7 M7	ナリアWDG パスワード顆粒水和剤 バルクート水和剤 バルクートフロアブル	1:ピラクロストロビン2:ホスカリト 1:フェンヘキサミド 1:イミノクタジンアルベシル酸塩 1:イミノクタジンアルベシル酸塩	2,000倍 1,500倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで	2回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	△※ ○ △ △	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤								注意事項		
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数		人毒 水産 (注)	
カイ イガ ラム シ類	(防除上のポイント) ○落弁後防除を徹底。 ○多発園では、第1回散布 の2週間後に2回目を 散布。	○多寄生時にはタワシ等 で、重なって寄生する 虫を落とし薬剤散布。	12月中旬～下旬								○薬害(イネ)		
			(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:マシン油	14倍	—	—	普		△	
			5 月	4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内		普	○
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキサゾン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内		普	△
				16		アブロード水和剤	1:アプロフェジン	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内		普	○
23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○					
			7月中旬～8月上旬								○薬害(イネ)		
			8月下旬～9月中旬										
			5月の薬剤と同じ(アブロード水和剤を除く)										
ア プ ラ ム シ類	(防除上のポイント) ○発生初期に散布。		4 月	1A		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○刺激(眼) ○薬害(イネ)
			6 月 上 旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアジシン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキサゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェンピラト	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	
			23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○		
29		ウララDF	1:フロニカスト	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○					
シ ン ク イ ム シ類		○被害果は見つけ次第 処分。	4 月	3A		スカウトフロアブル	1:トラロトリン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	○合ピレ(本冊P.15)参照。 ○合ピレ(本冊P.15)参照。 ○合ピレ(本冊P.15)参照。
			8 月	3A		テルスターフロアブル	1:ピフェトリン	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				3A		アグロスリン水和剤	1:シペルメリン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:シノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:クロラントラニプロール	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:シアントラニプロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
モモゴマダラノメイガ			4月～8月										
			4A		バリアード顆粒水和剤	1:チアクロプリト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△		
ケ ム シ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○作物や周辺植物上の卵 塊や集団にいる若齢幼虫 を処分。 ○冬季にまゆや蛹等を 捕殺。	3 月	1A		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
			5 月 9 月	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				18		ロムダンフロアブル	1:テブフェノジト	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:シアントラニプロール	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤								注意事項		
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数		人 毒	水産 (注)
カ メ ム シ 類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、 地域差や園地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策(本冊P.156) 参照		4 月 下 旬 〜 8 月	3A		アグロスリン水和剤	1:シベルメリン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○合ビレ(本冊P.15)参照。 ○合ビレ(本冊P.15)参照。 ○薬害(4~5月品種による) ○薬害(4~5月品種による)
				3A		テルスターフロアブル	1:ピフェントリン	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:シノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:シノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
ハ ダ ニ 類	(防除上のポイント) ○発生初期に防除。		7 月 下 旬 〜 8 月	12C		オマイト水和剤	1:BPPS	750倍	収穫7日前まで	1回	普	△※	○薬害(イネ) ○銅剤混用不可・銅剤近接散布 (効力低下・6ヶ月以上空ける)
				25A		スターマイトフロアブル	1:シエノピラフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:シフルトフェン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ピフェナゼート	1,000倍	収穫3日前まで	1回	普	△	
				23		ダニゲッターフロアブル	1:スピロメシフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				33		ダニオーテフロアブル	1:アシナビル	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	○	

2 野 菜

(1) 野菜病害虫防除法

[1] メロン

メロン

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
えそ斑点病	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、MNSVである。 ○メロン、マクワウリ、シロウリに発生する。 ○本病は下等菌類により土壌伝染する。	(耕種的防除法) ○床土は蒸気消毒機で125℃、30分処理する。 ○育苗期に発病したものは、定植しない。 ○発病株は早期抜き取り、処分する。											
ウイルス病	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、CMV・WMVである。 ○虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 ○CMV・WMVが、重複感染すると激しい症状となる。 (防除上のポイント) ○アブラムシ類の防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○寒冷紗やシルバーテープなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。 ○着果後の軽微な発病株は、最後に管理し、伝染を防止する。 ○発病株を早期抜き取り、処分する。	アブラムシ類の項参照										
黄化えそ病	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、MYSVである。 ○虫媒(ミナミキイロアザミウマ)伝染するウイルス病である。 (防除上のポイント) ○ミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。 ○発病株を早期抜き取り、処分する。	(耕種的防除法) ○寒冷紗被覆で育苗する。 ○シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○発病株を早期抜き取り、処分する。 ○圃場内外の除草を徹底する。	ミナミキイロアザミウマの項(本冊)参照										
斑点細菌病	(発生の特徴) ○本病原細菌は、多数のウリ科作物を侵すが、他科作物には病原性がない。	○茎葉の過繁茂を避ける。 ○排水を良くし、高畝とする。 ○ポリマルチや敷わらをする。	発病前 発病初期		24+M1	カスミンボルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					24+M1	銅剤及び混合剤の項参照	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
苗立枯病	(発生の特徴) ○リゾクトニア属菌によるものが多いが、ビシウム属菌等によっても発生する。	○床土は、無病土を使用する。 ○育苗床の蒸し込みを避ける。	床土消毒	土壌病害虫防除法の項(本冊)参照									
			は種後～	苗立枯病の項(本冊)参照									
菌核病	(発生の特徴) ○地表面に落下した菌核で越冬する。 ○咲き終わった花卉から発病する。	○被害部を早期に除去する。 ○換気を図り、マルチを行う。	期発病前 発病初		1	ベンレート水和剤	1:ベンリル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					12	セイビアーフロアブル20	1:フルジ'オキソニル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:イノクタジン'アルベ'シル酸塩 2:ヒリベン'カルブ'	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					7	バレード20フロアブル	1:ヒ'ラン'フルミト'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17	ピクシオDF	1:フェンピ'ラザミン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
黒点根腐病	(発生の特徴) ○定植後40日前後の、果実肥大がほぼ完了したところから、日中の萎れの有無に注意する。	○連作を避ける。 ○発病株を早期に抜き取り、処分する。 ○地温を下げる。	床土、本圃の 土壌消毒	土壌病害虫防除法の項(本冊)参照									

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法											
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項	
うどんこ病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> はじめは表面にうどん粉状の菌叢をもった円形の病斑となる。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> 葉の裏表をよく調べ、灰白色に変わった菌叢の有無で判定する。 防除を始めるのは、枯れ上がりが見えてからでは遅すぎる。円形の病斑が見え始めた頃から、防除を実施する。 水和剤は展着剤を加用する(乳剤は加用しない)。 	<ul style="list-style-type: none"> 被害残渣を圃場内に残さない。 発病した茎葉は、速やかに除去する。 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。 密植、株の過繁茂を避ける。 	発病前 ～ 発病初期	un	M5	ダコニール1000	1:TPN	700倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○薬害等(注)(本冊P.26)	
					M7	ベルコート水和剤	1:ミノクタジナルヘキサシル酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
					9	フルピカフロアブル	1:メパニピリム	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○		
					M10	モレスタン水和剤	1:キキサリン系	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	10回以内	普	△		○薬害等(注)(本冊P.26)
					3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
					U6+3	バンチョTF顆粒水和剤	1:シフルフェナミド2:トリフルミゾール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○		
					3+M3	テーク水和剤	1:シメコナゾール2:マンセブ	600～800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△		
					3	スコア顆粒水和剤	1:シフェノコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		○薬害等(注)(本冊P.26)
					11	ストロビーフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	アフエットフロアブル	1:ペンチオピラト	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	ネクスターフロアブル	1:イソピラサム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	ケンジャフロアブル	1:イソフェタミド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
					50	プロパティフロアブル	1:ピリオフェノン	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:フルチアニル2:メパニピリム	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△							
7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオピラト2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△							
M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ミノクタジナルヘキサシル酸塩 2:ピリオフェノン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○							
un	M10	バルミノ	1:キキサリン系	2,000倍	収穫3日前まで	10回以内	普	△						
銅剤及び混合剤の項(本冊)、くん煙剤の項(本冊)、微生物農薬の項(本冊)参照														
つる枯病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 茎の地際部に、最も発病しやすい。はじめ灰緑色、のちに黄褐色に変わる病斑を生ずる。湿度の高い時、病斑は水浸状を呈し、急速に広がる。 葉縁からくさび形に発病し、病斑面に小黑粒点が生じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 被害茎葉は、できるだけ除去する。 収穫後の残渣は、圃場外で適正に処分する。 	発病前 ～ 発病初期	un	M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンセブ	400～600倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○薬剤選択注意 ○発病部を削り塗布	
					M3	ベンコゼブフロアブル	1:マンセブ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△		
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×		
					M7	ベルコート水和剤	1:ミノクタジナルヘキサシル酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
					3	スコア顆粒水和剤	1:シフェノコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
					1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					1	トップジンMペースト	1:チオファネートメチル	原液	発病初期 但し、収穫21日前まで	1回	普	○		
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△※		○薬害等(注)(本冊P.26)
					11	ストロビーフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	アフエットフロアブル	1:ペンチオピラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオピラト2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△		
					7	ネクスターフロアブル	1:イソピラサム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
					7	ケンジャフロアブル	1:イソフェタミド	1500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ミノクタジナルヘキサシル酸塩 2:ピリベンカルブ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○							
M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ミノクタジナルヘキサシル酸塩 2:ピリオフェノン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数		注意事項	
べと病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ キュウリべと病の病原菌と同じ種である。 ○ 病斑の裏側にすす状のかびを生じることで、他の病害と区別可能である。 ○ 20～24℃が発病適温であり、多湿条件で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発病前から予防散布を定期的実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥料を十分に施し、肥切れしないようにする。 	発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	400～600倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○ 薬害等(注)(本冊P.26)
					M3	ジマンダイセンフロアブル	1:マンゼブ	500～800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	500～600倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	700～1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ホセチル	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:シアゾフアト	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:アミスプロム	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:マンゼブ ² :メタラキシルM	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:シモキサニル2:ベンチアハリカルフイソプロピル	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ヒパルブトラゾクス	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
40+M3	ベネセット水和剤	1:ベンチアハリカルフイソプロピル ² :マンゼブ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△						
40+M3	カンパネラ水和剤	1:ベンチアハリカルフイソプロピル ² :マンゼブ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△						
27+M5	ブリザード水和剤	1:シモキサニル2:TPN	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※						
27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:シモキサニル2:マンゼブ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△						
40+M1	フェスティバルC水和剤	1:シトモル ² :塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ベンチアハリカルフイソプロピル ² :TPN	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△※						
27+11	ホライズンドライフロアブル	1:シモキサニル2:ファミキサドン	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※						
銅剤及び混合剤の項(本冊)参照													
チネコウブセン	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 施設栽培での発生が多い。 ○ 連作を避ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 有機質を十分施用する。 ○ 床土は水田土壌を使用する。 ○ 連作を避ける。 	床土、本圃の土壤消毒		土壤病害虫防除法の項(本冊)参照								
			生育期	1B		ガードホープ液剤	1:ホスチアセート	4,000倍 20/㎡灌注	収穫28日前まで	1回	劇	○	○ 使用方法(注)(本冊P.27)、薬害等(注)(本冊P.26)
幼ウリハムシ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は7月下旬頃から羽化し、8月上旬・中旬が最盛期である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 幼植物期間中は成虫飛来回避のため被覆する。 ○ 成虫の産卵防止のために株元に川砂を敷く。 	発生前	1B		ダイアジノン粒剤3	1:ダイアジノン	6～9kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 土壌混和薬害等(注)(本冊P.26)
						シウ成リハム	○ 幼虫による被害は7月上旬から認められる。	初成虫発生	1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000倍
コナジラミ類	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には、成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 ○ 施設では、冬期も発育し、加害する。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 葉裏に十分散布する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。 ○ ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である(ミツバチを利用する場合は不可)。 	発生前	4A	ダントツ粒剤	1:クロチアエニジン	1～2g/株	育苗期後半	1回	普	△	<ul style="list-style-type: none"> ○ 株元処理 ○ 株元灌注(25～50ml/株)薬害(イネ) ○ 400株当り10～200(1株当り25～50ml)混用(注)(本冊P.27) ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 	
				23	モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○		
				28	ベリマークSC	1:シアントラニプロロール	25ml/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△		
				4A	アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△		
				4A	スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△		
				4A	ダントツ粒剤	1:クロチアエニジン	1～2g/株	定植時	1回	普	△		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法											
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項	
コナジラミ類			発生初期	21A+16		アブロードエースフロアブル	1:フェンピロキシメト2:プロフェジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(本冊P.26) 使用回数は育苗期含め3回以内、薬害(イネ)	
				4A		バリアード顆粒水和剤	1:チアクロプリト*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△		
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
				6		アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				5		デアナSC	1:スピネトラム	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド*2:スピノサド*	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
タバココナジラミ類 (シルバーリーフコナジラミを含む)				6		アグリメック	1:アバメクチン	500~1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△		
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ ワタアブラムシが主体である。 (防除上のポイント) ○ 葉裏及び生長点に寄生が多いので、この部分に丁寧に散布する。 ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部地域で認められている。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。	発生前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリト*	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布 ○ 株元灌注(25~50ml/株)薬害(イネ) ○ 400株当り10~200(1株当り25~50ml)混用(注)(本冊P.27) ○ 灌注(25ml/株) ○ 植穴又は株元土壌混和	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	500倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	○		
				28		ベリマークSC	1:シアントラニプリロール	25ml/400株	育苗期後半~定植当日	1回	普	△		
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプリロール	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△		
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリト*	1~2g/株	定植時	1回	普	△		
				発生初期	4A		アドマイヤー水和剤	1:イミダクロプリト*	2,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については着果後)	3回以内	劇		△
					4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト*	8,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇		△
					4A		バリアード顆粒水和剤	1:チアクロプリト*	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇		△
					4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普		○
					9B		チェス顆粒水和剤	1:ピトロジン	5,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普		○
9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン		4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
29		ウララDF	1:フロニカト*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○						
23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○						
28		ヨーバルフロアブル くん煙剤の項(本冊)参照	1:テトラニプリロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
ウリノメイガ	(病害虫の名称) ○ 標準和名(ワタヘリクロナメイガ)。	○ 蛹・幼虫を捕殺する。 ○ ハウス栽培では、開口部に防虫ネット等を設置する。	発生初期	5		デアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド*2:スピノサド*	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				6+15		アフームエクスセラ顆粒水和剤	1:エマクチン安息香酸塩2:ルフェヌロン	1000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンシアミド*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプリロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。 ○ 成虫の侵入を防止するため、施設の開口部に防虫ネット等(1mm目以下(0.6mm目が望ましい))を設置する。 ○ 被害を受けた収穫残渣は、発生源となるので、適切に処分する。	○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ 成虫の侵入を防止するため、施設の開口部に防虫ネット等(1mm目以下(0.6mm目が望ましい))を設置する。 ○ 被害を受けた収穫残渣は、発生源となるので、適切に処分する。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 灌注(25ml/株) ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴処理 ○ 単用散布とし、高温時には使用しない。
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	育苗期	1回	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	
			発生初期	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	2g/株	定植時	1回	普	×	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピノトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	
				28		ブレバソンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
トマトハモグリバエ			前発生	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
			初発生	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
		17			トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
		4A			アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項(本冊)参照											
ハダニ類	(防除のポイント) ○ 高密度になると防除効果が上がりにくいので、初期防除に努める。 ○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニの離脱、移動も考慮し適切に実施する。 ○ 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニの離脱、移動も考慮し適切に実施する。 ○ 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。	発生初期	6		コロマイト水和剤	1:ミルベメクチン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 単用散布とし、高温時には使用しない。 ○ 単用散布とし、高温時には使用しない。
				6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:アバメクチン	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				25A		スターマイトフロアブル	1:シエピラフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ピフェナゼート	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:シフルメフェン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				20B		カネマイトフロアブル	1:アセキノシル	1,000～1,500倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				19		デュアルサイド水和剤	1:プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル2:ホリオキシン複合体	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ピフルブミド ¹ 2:フェンピロキニメート	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B		ダニコングフロアブル	1:ピフルブミド ¹	3,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド ¹	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						(殺卵効果主体)	10B		パロックフロアブル	1:エトキサゾール	2,000倍	収穫前日まで	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法								注意事項
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	
ウイルス病	ToMVによるウイルス病 (発生の特徴) ○ 土壌伝染、種子伝染するウイルス病である。 ○ 強い汁液伝染力を持つため、発病株を管理した手・はさみ等を通しての感染も高率でおこる。 ○ クロルピクリンは効果が無い。 ----- CMVによるウイルス病 (発生の特徴) ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 ○ 露地トマトに発生が多い。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類の飛来防止と防除を行う。	(耕種的防除法) ○ 本病を対象とした種子消毒済みの種子を利用する。 ○ 床土は、無病土を使用する。 ○ 連作する場合は、抵抗性品種を利用する。 ○ 発病株は早期に抜き取る。 ○ 支柱等の資材を更新する。 ----- (耕種的防除法) ○ 育苗期間中は寒冷紗で被覆する。 ○ シルバーポリやシルバーテープなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。 ○ 圃場周辺を除草する。									
			アブラムシ類の項参照								
黄化葉巻病	TYLCVによるウイルス病 (発生の特徴) ○ 虫媒(タバココナジラミバイオタイプB、及びQ)伝染するウイルス病である。 ○ タバココナジラミバイオタイプB及びQの防除を徹底する。 ○ 本県はイスラエル系とマイルド系が確認されている。	(耕種的防除法) ○ 防虫ネット(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))等で、育苗圃や本圃への媒介虫の侵入を防止する。 ○ 施設内外の除草に努め、近くに媒介虫が寄生しやすい植物を置かない。 ○ 発病株は、早急に除去し、適切に処分する。 ○ ウイルスの系統に応じた耐病性品種を利用する。									
トマト黄化葉巻病の項(本冊)参照											
縮黄病 萎	TbLCJVによるウイルス病 (発生の特徴) ○ 虫媒(タバココナジラミ)伝染するウイルス病である。	(耕種的防除法) ○ 黄化葉巻病の防除法の項参照(上記)。									
コナジラミ類、タバココナジラミの項参照											
青枯病	(発生の特徴) ○ 梅雨明けから夏季にかけての高温期に発生し、連作した圃場で多発する。 ○ 青枯病菌は、過湿な圃場状態を好み、排水不良、過灌水や冠水によって爆発的に発生する。 ○ 外観上健全と見えた株が、急激に萎れ、短期間で枯死する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 5年以上の輪作を行う。 ○ 連作を避け、発病圃場は、3年以上水田化を行う。 ○ 発病株は早期に除去する。 ○ 移植後の植え傷みや、管理作業時に根に傷をつけないようにする。 ○ 排水を図る。 ○ 敷きわらやマルチ等により地温の上昇を抑制させる。 ○ 石灰を多量に施用する(200kg/10a)。 ○ 抵抗性台木を利用する。 ○ ハサミ等作業器具の消毒、および手の洗浄を行いながら作業する。	床土、本圃の土壌消毒	土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
斑点細菌病	(防除上のポイント) ○ 育苗期から予防する。 ○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。	○ 連作を避ける。 ○ 窒素肥料の多用を避ける。 ○ 被害茎葉は、圃場外へ持ち出す。 ○ 排水・換気等を図り、多湿を避ける。 ○ ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防止する。	発病前～	銅剤及び混合剤の項(本冊)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項
軟腐病	(発生の特徴) ○軟腐病菌は灌水や、降雨による土壌のはね上がりで伝染する。 ○茎はずい部が腐敗消失し、やがて枯死する。 (防除上のポイント) ○台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。 ○芽かき直後に薬剤散布を実施する。	○床土は無病土を使用する。 ○連作を避ける。 ○傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。 ○窒素肥料の多用を避ける。 ○ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防ぐ。	発病前～			銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 微生物農薬の項(本冊)参照						
病苗立枯	(発生の特徴) ○幼苗の段階で罹病すると、倒伏することがある。	○床土は無病土を使用する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照						
			は種後～			苗立枯病の項(本冊)参照						
白絹病	(発生の特徴) ○高温多湿条件で多発する。 ○前作物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。	○連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○被害株や病原菌の付着した敷わら等は、菌核を落とさないように、圃場外へ持ち出す。 ○発病株周辺の表土は、菌核が多いので土中深く埋め込む。 ○3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を実施する。 ○植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正する。 ○無病苗を定植する。										
萎凋病	(発生の特徴) ○比較的高温期に発生する。 ○葉が黄化し、茎の維管束の褐変は、根から発病した葉の位置付近まで比較的広範囲に認められる。	○床土は無病土を使用する。 ○5年以上の輪作を行う。 ○排水を良くする。 ○石灰を多量施用する(200kg/10a以上)。 ○有機物を施用する。 ○敷きわらを行う等、地温の上昇を抑制する。 ○抵抗性台木に接木する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照						
根腐萎凋病	(発生の特徴) ○夏秋栽培でも梅雨時期に発病することがある。	○床土は無病土を使用する。 ○5年以上の輪作を行う。 ○排水を良くする。 ○石灰を多量施用する(200kg/10a以上)。 ○有機物を施用する。 ○敷きわらを行う等、地温の上昇を抑制する。 ○抵抗性台木に接木する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法											
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項		
疫病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ハウス栽培では、低温多湿時に、露地栽培では梅雨時期に発病が多い。 梅雨入り後や曇雨天(20℃前後の低温で多湿条件)が続くと発生しやすく、窒素過多・多湿条件は、発病を著しく助長する。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> 苗床で幼苗に発生することがあるので、苗床での薬剤散布を十分に行う。 防除は発病前から予防散布を定期的に行う(特に発生しやすい時期は、雨の合間を利用して薬剤散布を行う)。 初発を確認したら、散布間隔を短縮し、集中的に薬剤散布する。 	<ul style="list-style-type: none"> 露地栽培ではマルチをし、雨で土粒が跳ね上がらないようにする。可能であれば、雨よけ栽培にする。 排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ハウス栽培では夜間、茎葉に水滴がつかないように管理に努める。 被害茎葉は第二次伝染源となるので除去する。 被害残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。 	床土、本圃の土壌消毒	土壌病害虫防除法の項(本冊)参照										
				発病前〜発病初期	M3	M5	ベンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					27+11	40+M1	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	
							ホライズンドライフロアブル	1:シモキサニル2:ファモキサトニ	1,500~2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
							フェスティバルC水和剤	1:シトモルフ2:塩基性塩化銅	600~800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:シモキサニル2:ベンチアハリカルブイソプロピル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						21+27	ダイナモ顆粒水和剤	1:アミスプロム2:シモキサニル	2,000~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
						21	ランマンフロアブル	1:シアゾファスト	1,000~2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
						21	ライメイフロアブル	1:アミスプロム	2,000~4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
						45+40	ザンプロDMフロアブル	1:アマトラジン2:シトモルフ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
	40	レーバスフロアブル	1:マンジブロハミド		2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
	40+M5	プロボーズ顆粒水和剤	1:ベンチアハリカルブイソプロピル2:TPN	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※						
	21+49	ゾーバックエンテクタSE	1:アミスプロム2:オキサチアピプロリン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○						
			銅剤及び混合剤の項(本冊)参照											
葉かび病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 施設での発病が激しい。 高温期に病勢は衰える。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> 感染から発病まで2週間以上かかることもあり、発病後からの防除では効果が上がりにくい。感染初期から防除を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 抵抗性品種を栽培する。(抵抗性品種を侵す葉かび病菌の新レースが確認されており、選択には注意が必要) 密植を避け、草勢を落とさないように管理する。 ハウスでは排水を良くし、換気に努める。 過度の灌水は避ける。 多発した葉は、伝染源となるので除去する。 資材を消毒又は更新する。 	発病前〜発病初期	M7	M7	ベルコート水和剤	1:ミノクタジナルベシル酸塩	6,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	<ul style="list-style-type: none"> ○ 薬剤選択注意 ○ 薬剤選択注意 ○ 葉害等(注)(本冊P.26) ○ 薬剤選択注意 	
				M7	M5	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				M5	10+1	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×		
				10+1		ゲッター水和剤	1:シエトフェンカルブ2:チオファネートメチル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				10+1		ニマイバー水和剤	1:シエトフェンカルブ2:ベノミル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				3		トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	3,000~5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3		ラリー乳剤	1:ミクロブタニル	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				3		ラリー水和剤	1:ミクロブタニル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				7		アフエツトフロアブル	1:ペンチオピラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				7		ネクスターフロアブル	1:イソピラサム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				7		バレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				7		ケンジャフロアブル	1:イソフェタミド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				7		カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△		
11+7		シグナムWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※						
11+M5		アミスターオブティフロアブル	1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※						
7+M5		ベジセイバー	1:ペンチオピラト2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
			くん煙剤の項(本冊)参照											
			銅剤及び混合剤の項(本冊)参照											
			微生物農薬の項(本冊)参照											
すすかび病	<p>(病害虫の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> 類似する葉かび病との識別には、検鏡による病原菌の観察が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 密植を避け、排水を良くし、多湿を防ぐ。 発病葉、被害残渣は圃場外に持ち出し、適切に処分する。 	発病前〜発病初期	M5	M7	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	<ul style="list-style-type: none"> ○ 葉害等(注)(本冊P.26) ○ 薬剤選択注意 	
				M7	M3	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				M3	3	ベンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				3	3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	3	トリフミン乳剤	1:トリフルミゾール	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				11		ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピロベンカルブ	2,000~3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				11+M5		アミスターオブティフロアブル	1:アゾキシストロビン2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
7+M5		ベジセイバー	1:ペンチオピラト2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
				10+1		ニマイバー水和剤	1:シエトフェンカルブ2:ベノミル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 低温(20℃以下)多湿条件で発生する。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 予防散布(発病後は効果が上がりにくい)を行う。 ○ 発病後は7～10日間隔で防除する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。 	発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	<ul style="list-style-type: none"> ○ 薬剤選択注意 ○ 薬剤選択注意 ○ 被害等(注)(本冊P.26) ○ 薬剤選択注意 ○ 被害等(注)(本冊P.26)
					M7	ベルコート水和剤	1:ミノクタジナルベシル酸塩	6,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M7	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:フルジ'オキシニル	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ジ'エトフェンカルブ'2:チオファネートメチル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					10+1	ニマイパー水和剤	1:ジ'エトフェンカルブ'2:ベ'ニル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタストライフロアブル	1:ボ'スカリド'	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	アフエットフロアブル	1:ペン'チオピ'ラド'	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ピ'ラジ'フルミド'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:イソ'フェタミド'	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:イン'ピル'ラザム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:イン'ピル'フルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ペン'チオピ'ラド'2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
11+M5	アミスターオペティフロアブル くん煙剤の項(本冊)参照 微生物農薬の項(本冊)参照	1:アゾキシストロビン'2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※						
うどんこ病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ハウス栽培で発生が多い。 ○ 乾燥条件で多発する。 ○ 発病適温は、20～25℃である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通風を良くする。 ○ 密植を避ける。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ 樹勢低下を避ける。 ○ 被害残渣を除去する。 	発病前～発病初期		7	アフエットフロアブル	1:ペン'チオピ'ラド'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:イン'ピル'ラザム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ピ'ラジ'フルミド'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:イソ'フェタミド'	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:イン'ピル'フルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ペン'チオピ'ラド'2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M7	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					NC	カリグリーン	1:炭酸水素カリウム	800～1,000倍	収穫前日まで	—	普	△	
					NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ナトリウム	800～1,000倍	収穫前日まで	—	普	△	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:シフルフェナミド'2:トリフルミゾール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					50	クロスアウトフロアブル ベミデタッチ	1:ピ'リオフェノ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
							1:グリセリン 酢酸脂肪酸エステル	500倍	収穫前日まで	—	普	○	
							銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 微生物農薬の項(本冊)参照						
輪紋病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 乾燥条件で多発する。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 予防散布の効果が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。 ○ ハウス栽培では、換気を図り、多湿を避ける。 	発病初期～発病前		M3	ベンコゼブフロアブル	1:マンセブ'	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	
					7	ネクスターフロアブル	1:イン'ピル'ラザム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項(本冊)参照							
斑点病	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 品種「千果」「百花繚乱」は、本病に弱く発病が多い。 		発病初期～発病前		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	
					M7	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ペン'チオピ'ラド'2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:マンデ'ストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					12	セイビアーフロアブル20	1:フルジ'オキシニル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項(本冊)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
菌核病	(発生の特徴) ○ハウス栽培では無加温栽培で発生が多い。 ○発病は低温(18~20℃)・多湿条件で見られる。 ○発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。	○発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。	発病前 〜 発病初期		10+1	ゲッター水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:チオファネートメチル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○薬剤選択注意
					10+1	ニマイパー水和剤	1:ジエトフェンカルブ2:ベノリル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ボスカリド	1,000~1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○薬害等(注)(本冊P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ペンチオピラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	バレード20フロアブル	1:ピラジフルミト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:インピラサム	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:マンデストロピン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
ネコブセンチュウ		○有機質資材を十分施用する。 ○床土は、水田土壌を使用する。 ○連作を避ける。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
			生育初期	1B		ガードホープ液剤	1:ホスチアゼート	4,000倍 20/㎡灌注	収穫前日まで	1回	劇	○	○薬害等(注)(本冊P.26)
アブラムシ類	(発生の特徴) ○モモアカアブラムシが主体である。	○無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。 ○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺の除草に努める。 ○シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。 ○ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。	発生前	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	5g/培土0	は種時又は鉢上げ時	1回	普	△	○育苗培土混和
				28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	25ml/400株	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○使用液量400株当り10~200(1株当り25~50ml)、混用(注)(本冊P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリト2:シアントラニプロール	2g/株	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○株元処理
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○25ml/株灌注
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○株元処理
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリト	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリト	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1~2g/株	定植後 但し収穫前日まで	3回以内	普	△	○株元散布
			発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	生育期但し、 収穫前日まで	2回以内	普	△	○株元散布
			発生前	4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	生育期但し、 収穫前日まで	2回以内	普	△	○株元散布
	4A		アドマイヤーフロアブル	1:イミダクロプリト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△				
	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△				
	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
	4A		バリアード顆粒水和剤	1:チアクロプリト	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△				
	9B		チェス顆粒水和剤	1:ピトロジン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○				
	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキサゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○				
	29		ウララDF	1:フロニカト	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
	28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害等(注)(本冊P.26)			
	4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○				
						気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類	(防除上のポイント) ○トマト黄化葉巻病の項(本冊参照)	○雑草(特にキク科)にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。 ○ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である。ただし、マルハナバチを使用する場合は注意する。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1~2g/株	育苗期	1回	普	△	○株元散布
			4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1~2g/株	育苗期	1回	普	△	○株元散布	
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○株元処理	
			4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1g/株	育苗期後半	1回	普	×	○株元散布	
			4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリト'	0.5~1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元散布	
			4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	5g/培土0	は種時又は鉢上げ時	1回	普	△	○育苗培土混和	
			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	100倍	鉢上時又は定植時	1回	普	△	○葉害等(注)(本冊P.26)	
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	100倍	鉢上時又は定植時	1回	普	△	○葉害等(注)(本冊P.26)	
			28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	25ml/400株	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○使用液量400株当り10~20ℓ(1株当り25~50ml)、混用(注)(本冊P.27)	
			4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリト'2:シアントラニプロール	2g/株	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○株元処理	
			28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○25ml/株灌注	
			4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリト'	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和	
			4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリト'	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和	
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和	
			4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和	
			4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和	
			4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和	
			4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1g/株	定植時	1回	普	×	○植穴処理	
			発生初期	7C		ラノーテープ	1:ヒプリプロキシフェン	10~50㎡/10a	栽培期間中	1回	普	○	○ラノーテープの注意事項(本冊P.370)
			4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	生育期但し、収穫前日まで	2回以内	普	△	○株元散布	
			4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	生育期但し、収穫前日まで	2回以内	普	△	○株元散布	
			9B		チェス顆粒水和剤	1:ヒトメロジン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○タバココナジラミには効果低い。	
			29		ウララDF	1:フロニカト'	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○タバココナジラミには効果低い。	
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)	
			15		ノーモルト乳剤	1:テフルベンズロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)	
			15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)	
			15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)	
4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト'	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	登録はタバココナジラミ				
4A		バリアード顆粒水和剤	1:チアトキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△					
4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※					
6		アニキ乳剤	1:レビメクチン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※					
5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸クリセリド'2:スピノサト'	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○葉害等(注)(本冊P.26)				
9B		コルト顆粒水和剤 気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照	1:ヒプリルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イダクダロプリド*	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤(イネ) ○ 葉害等(注)(本冊P.26) ○ タバココナジラミには効果低い ○ 登録はタバココナジラミ類
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアシン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵し、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	1B		カルホス粉剤	1:イソキサチオン	6kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理 ○ 株元散布 合ビレ(注)(本冊P.15)
			生育初	3A		ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	生育初期	1回	普	○※	
			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5~6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫も、見つけたい捕殺する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット(4mm以下)等での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:テフルヘンズロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)
			15		アダブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		
			5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			un		プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏~秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ハウス開口部に防虫ネット等(4mm目以下)を張り、侵入防止を図る。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺する。	発生初期	15		アダブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26) ○ 葉害等(注)(本冊P.26)
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			6		アフーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※		
			6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		
			5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド*	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸クリセリド*2:スピノサド*	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			13		コテツフロアブル	1:クロルフェナヒル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※		
			un		プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンシミアミド*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			28		プレバゾンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
BT剤の項(本冊)参照			BT剤の項(本冊)参照										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
ト マ ト キ バ ガ	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1年に複数回の世代が発生し、繁殖力が高い。 ○ 卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。 ○ 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。 ○ 土中や葉の表面で蛹化。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。 ○ 被害葉や被害果は圃場内から持ち出すとともに、野外に放置せず速やかに適切に処分。 	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラネリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	<ul style="list-style-type: none"> ○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27) ○ 株元散布、同時施用(注)(P.27) ○ 葉害等(注)(本冊P.26)
			発生前	28		ブリロソソ粒剤オメガ	1:シアントラネリプロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	
			発生初期	5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド'2:スピノサド'						
				6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩						
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル						
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン						
				28		ベネビアOD	1:シアントラネリプロール						
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジ'アミ'						
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラネリプロール						
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミ'										
un		プレオフロアブル	1:ヒリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△					
ハ モ グ リ バ エ 類	<p>(発生の特徴)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。 <p>(防除上のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や、有機リン系薬剤等)を使用すると、その後多発することがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ 成虫の侵入を防止するため、ハウスの開口部に防虫ネット等(1mm目以下(0.8mm目以下が望ましい))を設置する。 ○ 被害残渣は発生源となるので、適切に処分する。 	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	<ul style="list-style-type: none"> ○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 50mℓ/株灌注 展着剤は使用しない ○ 25mℓ/株灌注 展着剤は使用しない ○ 使用液量400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(本冊P.27) ○ 25mℓ/株灌注 ○ 株元散布 ○ 株元散布、使用方法(注)(P.27) ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴土壌混和 ○ 植穴処理 ○ 植穴処理
			発生前	4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	
			28		プレバソソフロアブル5	1:クロラントラネリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△		
			28		プレバソソフロアブル5	1:クロラントラネリプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△		
			28		ベリマークSC	1:シアントラネリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△		
			28		ヨーバルフロアブル	1:テトラネリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△		
			4A+28		アペイル粒剤	1:アセタミ'プロ'2:シアントラネリプロール	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○		
			4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	2g/株	定植時	1回	普	△		
			4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△		
			4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△		
4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	1～2g/株	定植時	1回	普	×					
4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1～2g/株	定植時	1回	普	△					

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法											
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 (注)	水産 (注)	注意事項	
ハモグリバエ類			生育期	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26)	
				6		コロマイト乳剤	1:ミルベ [®] メクチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
				6		アフーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※		
				6		アニキ乳剤	1:レビ [®] メクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※		
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド [®]	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド [®] 2:スピノサド [®]	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○		○ IGR剤(注)(本冊P.15)
				28		プレバゾンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		○ 葉害等(注)(本冊P.26)
				28		ベネビアOD	1:シアントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
un		プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド [®]	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△						
マメハモグリバエ			生育期	15		ガスケード乳剤	1:フルフェクスロン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
トマトハモグリバエ			発生前	4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリト [®]	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和	
			生育期	15		カスケード乳剤	1:フルフェクスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
				28		プレバゾンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 果実では、開花時に子房に産卵するため、産卵痕の周りが白く色が抜け、白ぶくれ症になる。	○ 雑草(特にキク科)にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。 ○ ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である。ただし、マルハナバチを使用する場合は注意する。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	25ml/400株	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当たり10~20ℓ(1株当たり25~50ml)、混用(注)(本冊P.27)	
			4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和		
			生育期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト [®]	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26)	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド [®]	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド [®] 2:スピノサド [®]	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)		
			30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド [®]	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ ヒラズハナアザミウマには効果が劣る		
34		ファインセーブフロアブル	1:フロメキン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×						
28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
ミカンキイロアザミウマ			生育期	15		ガスケード乳剤	1:フルフェクスロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)	
			13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※			

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード ¹⁾	FRAC コード ²⁾	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 養液栽培で発生が多い。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し、適切に実施する。	発生初期	13 20D		コテツフロアブル マイトコーネフロアブル 気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照	1:クロルフェナビル 1:ピフェナゼート	2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 1回	劇 普	△※ △	○ 登録はナミハダニ
トマトサピダニ	(発生の特徴) ○ 養液栽培等ハウス内が乾燥する条件で発生が多い。 ○ 密度が高くなると葉が黄化する。	○ ナス科雑草にも寄生するので、ハウス内や周辺の除草に努める。	発生初期	4C 6 6 6 15 15 20D 13 21A 30 34		トランスフォームフロアブル コロマイト乳剤 アフーム乳剤 アニキ乳剤 マッチ乳剤 カスケード乳剤 マイトコーネフロアブル コテツフロアブル ダニトンフロアブル グレーシア乳剤 ファインセーブフロアブル 気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照	1:スルホキサフロ 1:ミルベメクチン 1:エマメクチン安息香酸塩 1:レピメクチン 1:ルフェスロン 1:フルフェノクスロン 1:ピフェナゼート 1:クロルフェナビル 1:フェンピロキシメト 1:フルキサメタクト ³⁾ 1:フロトキン	1,000～2,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 1,000～4,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫開始14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 5回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普 劇 普 普 劇	○ △※ △※ △※ △ △ △ △※ × △ ×	○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)
カタメツクムジリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動する。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害する。	○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分する。	生育全期	un		スラゴ メタアルデヒド剤の項(本冊)参照	1:リン酸第二鉄	1～5g/m ²	発生時	—	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置

[3] 甘長とうがらし

甘長とうがらし

※一部地域で「ジャンボししとう」と呼ばれる。万願寺とうがらし、伏見とうがらし、三宝とうがらし、ひもとうがらしも含まれる。農薬登録の「ししとう」とは異なる点に注意。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)
ウイルス病	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、ToMV、PMMoV ○土壌伝染、種子伝染するウイルス病。 ○伝染力が強く、手、ハサミ等を通しての感染も高率で起こる。 ○抵抗性品種でもトウガラシ系統ウイルスには侵される。	(耕種的防除) ○床土は無病土を使用する。 ○抵抗性品種を利用する。 ○発病株の早期抜き取り。 ○支柱等資を更新する。										
			(発生の特徴) (耕種的防除) (防除上のポイント) ○病原ウイルスは、CMV、BBWV ○虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○露地栽培で被害が大きい。 ○シルバーマルチやシルバーテープ等により、アブラムシ類の飛来防止。 ○アブラムシ類の防除を徹底する。									
青枯病	(発生の特徴) ○日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて青枯れ状態になる。 ○導管が褐変し、切断面から乳白色の菌泥が出る。	○連作を避ける。 ○発生圃場は3年程度水田化。 ○5年以上の輪作。 ○石灰を多量に施す(200kg/10a)。 ○有機質を施し、敷わらやマルチ等により地温を著しく高くしない。	(耕種的防除) ○排水を回り、多湿を避ける。 ○根傷みのないよう管理作業には十分注意。 ○発病株に触れた手で健全株に触れないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○被害株を除去。									
			アブラムシ類防除の項参照 床土、本圃の 土壌消毒									
斑点細菌病	(発生の特徴) ○高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大きい。 ○多発すると、果実では小円形のそうか症状となることがある。 ○発病により激しく落葉することがある。	(耕種的防除) ○低湿地での作付を避け、排水対策を講じる。 ○連作を避ける。 ○窒素質肥料の偏用を避け、カリ肥料を十分施す。	発病前	24+M1	カスミンボルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
			発病前	24+M1	銅剤及び混合剤の項(本冊参照)	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
病苗立枯	(発生の特徴) ○軟弱な苗で発生が多い。	○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。	床土消毒 土壌消毒 土壌病害虫防除法の項(本冊)参照									
			発病前 21 ランマンフロアブル 1:シアゾファミド 2,000倍 収穫前日まで									
疫病	(発生の特徴) ○梅雨入り後や曇雨天(20℃前後の低温で多湿条件)が続くと発生しやすく、窒素過多、多湿環境は疫病を著しく助長する。	○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○被害茎葉は第二次伝染源となるので除去。 ○被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。	床土、本圃の 土壌消毒 土壌病害虫防除法の項(本冊)参照									
			発病前	21	ランマンフロアブル	1:シアゾファミド	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
白絹病	(発生の特徴) ○高温多湿条件下で発生が多くなる。 ○前作作物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、疫病を助長する。	○連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○3~4年間水稲と輪作するか、田畑輪換。 ○定植前に石灰を施用し、土壌pHを矯正。 ○無病苗の定植。 ○被害株、病原菌の付いた敷わら等は、菌核を落とさないように圃場外へ持ち出す。 ○発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。	発病前 14 リゾレックス水和剤 1:トルクロホスチル 1,000倍 収穫前日まで									
			発病初期	14	リゾレックス水和剤	1:トルクロホスチル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

ここでは、甘長とうがらし、とうがらし類、ピーマン及びとうがらし類、野菜類で登録のある薬剤を記載。

○ 10/㎡株元灌注

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 他作物のうどんこ病のように表面に粉体を作らない。	○ 被害残渣は圃場外で適切に処分。 ○ 発病した茎葉を除去。 ○ 窒素過多・肥切れのないよう適正に肥培管理。 ○ 密植、過繁茂を避ける。	発病初期		3 3 11 11+7 NC NC 24+M1	ラリー水和剤 トリフミン水和剤 ストロビーフロアブル シグナムWDG カリグリーン ハーモメイト水溶剤 カスミンボルドー	1:ミクロブタニル 1:トリフルベンゾール 1:クレソキシムメチル 1:ピラクストロビン2:ボスカリド 1:炭酸水素カルウム 1:炭酸水素ナトリウム 1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	4,000~6,000倍 4,000~5,000倍 4,000倍 2,000倍 800~1,000倍 800~1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内 2回以内 2回以内 - - 5回以内	普 普 普 普 普 普 普	○ △ △ △※ ○ △ △	○ 薬害等(注)(本冊P.26)
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生。	○ 花卉・果実・茎・葉等で発生、被害部は感染源となるので除去。 ○ 密植を避ける。	発病前初期		11+7 7	シグナムWDG カンタスドライフロアブル 微生物農薬の項(本冊)参照 銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 くん煙剤の項(本冊)参照	1:ピラクストロビン2:ボスカリド 1:ボスカリド	2,000倍 1,000~1,500倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△※ ○	○ 薬害等(注)(本冊P.26)
斑点病	(防除上のポイント) ○ 予防散布を徹底。	○ 通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。 ○ 発病葉は早期に除去。	発病前		3 24+M1	ラリー水和剤 カスミンボルドー	1:ミクロブタニル 1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	4,000~6,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 5回以内	普 普	○ △	
炭疽病	(発生の特徴) ○ 降雨や灌水時の土壌の跳ね上がりにより分生子が飛散し感染する。 ○ 傷口から感染しやすい。 ○ 近年、県内では、 <i>Colletotricum scovillei</i> による炭疽病が確認されており、従来の <i>C. capsici</i> 、 <i>C. gloeosporioides</i> に比べ被害が激しい。 (防除上のポイント) ○ 予防散布に重点を置く。	○ 発病葉や発病果は発見次第除去。 ○ 雨よけ栽培やマルチ被覆等により、降雨による跳ね上がりを防ぐ。 ○ 果実に傷がつかないよう支柱や枝つり等で固定する。	発病前 発病初期		11+7 11	シグナムWDG スクレアフロアブル	1:ピラクストロビン2:ボスカリド 1:マンデクストロビン	2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△※ ○	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。 ○ 露地栽培では、7~9月に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部地域で認められている。	○ シルバーマルチやシルバーテープ等を使用。 ○ 圃場内外の除草。	発生前	4A 23 4A 4A		アドマイヤー1粒剤 モベントフロアブル アドマイヤー1粒剤 モスピラン粒剤	1:イミダクロプリド 1:スピロテトラマト 1:イミダクロプリド 1:アセタミプリド	1g/株 500倍 1~2g/株 0.5g/株	育苗期後半 育苗期後半 定植時 定植時	1回 1回 1回 1回	普 普 普 普	△ ○ △ △	○ 株元散布 ○ 25~50mℓ/株灌注、薬害等(注)(本冊P.26) ○ 植穴又は株元土壌混和 ○ 植穴土壌混和
			発生初期	9B 9B 23		チェス顆粒水和剤 コルト顆粒水和剤 モベントフロアブル	1:ピロトリン 1:ピリフルキナザン 1:スピロテトラマト	5,000倍 4,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	○ △ ○	○ 薬害等(注)(本冊P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
コナジラミ類	(防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布。	○ 無寄生苗を定植。 ○ 周辺雑草は発生源となるので、圃場内外の除草。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(本冊P.26) ○ 25mℓ/株灌注
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期	1回	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	
			発生前	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(本冊P.26)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:トリフルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド ² :スピノサト ¹	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵し、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分。 ○ 被害株土壤中の幼虫を捕殺。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ダイアジノン	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
				3A		ガードベイトA	1:ペルメトリン	3kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○※	○ 合ピレ(注)
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏～秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 被害果を除去。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺。	発生前	15		マツチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15) ○ 登録はタバコガ類
				6		アフーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジジアミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
			un		プレオフロアブル	1:ヒリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
			5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド ² :スピノサト ¹	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ ふ化幼虫の集団加害葉を除去。		6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項(本冊)参照											

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 発生初期に丁寧に散布。 ○ 系統の異なる薬剤によるローテーション防除。	○ 圃場内外の除草に努める。 ○ 隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分、雑草の刈り払い等は、ハダニの離脱・移動も考慮し適切に実施。 ○ 発生初期は一部の株に集中的に発生する傾向があるので、早期発見に努める。	前発生	23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	500倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 50mℓ/株灌注、葉害等(注)(P.26)
			発生初期	21A		ダニトロンフロアブル	1:フェンピロキシメト	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	×	○ 葉害等(注)(本冊P.26)
				13 23		コテツフロアブル モベントフロアブル	1:クロルフェナピル 1:スピロテトラマト	2,000倍 2,000倍		収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	劇 普	
チャノホコリダニ	(発生の特徴) ○ 生長点や新葉に寄生が多い。 (防除上のポイント) ○ 発生初期に生長点によくかかるよう散布。	○ 芯止まり株の除去。	発生前	23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	500倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 50mℓ/株灌注、葉害等(注)(P.26)
			発生初期	6 23		アニキ乳剤 モベントフロアブル	1:レピメクチン 1:スピロテトラマト	2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	△※ ○	○ 葉害等(注)(本冊P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード ¹⁾	FRAC コード ²⁾	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)
ウイルス病	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、ToMV、PMMoV ○土壌伝染、種子伝染するウイルス病。 ○伝染力が強く、手、ハサミ等を通しての感染も高率で起こる。 ○抵抗性品種でもトウガラシ系統ウイルスには侵される。	(耕種的防除) ○床土は無病土を使用する。 ○抵抗性品種を利用する。 ○発病株の早期抜き取り。 ○支柱等資材を更新する。										
			(防除上のポイント) ○アブラムシ類の防除を徹底する。									
アブラムシ類防除の項参照												
青枯病	(発生の特徴) ○日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて青枯れ状態になる。 ○導管が褐変し、切断面から乳白色の菌泥が出る。	○連作を避ける。 ○発生圃場は3年程度水田化。 ○5年以上の輪作。 ○石灰を多量に施す(200kg/10a)。 ○有機質を施し、敷わらやマルチ等により地温を著しく高くしない。	(耕種的防除) ○排水を回り、多湿を避ける。 ○根傷みのないよう管理作業には十分注意する。 ○発病株に触れた手で健全株に触れないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○被害株を除去。									
			床土、本圃の 土壌消毒	土壌病害虫防除法の項(本冊)参照								
斑点細菌病	(発生の特徴) ○高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大きい。 ○多発すると、果実では小円形のそうか症状となることがある。 ○発病により激しく落葉することがある。	(耕種的防除) ○低湿地での作付を避け、排水対策を講じる。 ○連作を避ける。 ○窒素質肥料の偏用を避け、カリ肥料を十分施す。	発 病 前)		24+M1	カスミンボルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△
					24+M1	銅剤及び混合剤の項(本冊)参照	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△
苗立枯病	(発生の特徴) ○軟弱な苗で発生が多い。	○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の適正な水管理。	床土消毒		土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
			は種後		苗立枯病の項(本冊)参照							
疫病	(発生の特徴) ○梅雨入り後や曇雨天(20℃前後の低温で多湿条件)が続くと発生しやすく、窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。	○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○被害茎葉は二次伝染源となるので除去。 ○被害茎葉残渣は感染源になるので、栽培後は圃場外で適切に処分。	床土、本圃の 土壌消毒		土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
			発 病 前)		21	ランマンフロアブル	1:シアゾファイト	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△
				21	ライメイフロアブル	1:アミスプロム	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

ここでは、甘長とうがらし、とうがらし類、ピーマン及びびとうがらし類、野菜類で登録のある薬剤を記載。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)
白絹病	(発生の特徴) ○高温多湿条件下で発生が多くなる。 ○前作物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。	○連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換。 ○定植前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正。 ○無病苗を定植。 ○被害株、病原菌の付いた敷わら等は、菌核を落とさないように圃場外へ持ち出す。 ○発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。	発病前～発病初期									
					14	リゾレックス水和剤	1:トルクロホスメチル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△
うどんこ病	(発生の特徴) ○他作物のうどんこ病のように表面に粉体を作らない。	○被害残渣は圃場外で適切に処分。 ○発病した茎葉を除去。 ○窒素過多・肥切れのないよう適正に肥培管理。 ○密植、株の過繁茂を避ける。	発病初期	3	ラリー水和剤	1:ミクロブタニル	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	○葉害等(注)(本冊P.26)
				3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	4,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
				11	ストロビーフロアブル	1:クロソキシムメチル	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				11+7	シグナムWDG	1:ピラクロストロビン2:ホスカリド*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				NC	カリグリーン	1:炭酸水素カリウム	800～1,000倍	収穫前日まで	-	普	○	
				NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ナトリウム	800～1,000倍	収穫前日まで	-	普	△	
				24+M1	カスミンボルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
				50	クロスアウトフロアブル 微生物農薬の項(本冊)参照	1:ヒリオフィノン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
斑点病	(防除上のポイント) ○予防散布を徹底。	○通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。 ○発病葉は早期に除去。	発病前	3	ラリー水和剤	1:ミクロブタニル	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
				24+M1	カスミンボルドー	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
炭疽病	(発生の特徴) ○降雨や灌水時の土壌の跳ね上がりにより分生子が飛散し感染する。 ○傷口から感染しやすい。 ○近年、県内では、 <i>Colletotricum scovillei</i> による炭疽病が確認されており、従来の <i>C. capusici</i> 、 <i>C. gloeosporioides</i> に比べ被害が激しい。 (防除上のポイント) ○予防散布に重点を置く。	○発病葉や発病果は発見次第除去。 ○雨よけ栽培やマルチ被覆等により、降雨による跳ね上がりを防ぐ。 ○果実に傷がつかないように支柱や枝つり等で固定する。	発病前	11+7	シグナムWDG	1:ピラクロストロビン2:ホスカリド*	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				11	スクレアフロアブル	1:マンデ*ストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○発生の主体は、ワタアブラムシである。 ○露地栽培では、7～9月に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部の地域で認められている。	○シルバーマルチやシルパーテープ等を使用する。 ○圃場内外の除草。	発生前	4A	アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリド*	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元散布 ○25～50ml/株灌注、葉害等(注)(本冊P.26)
				23	モベントフロアブル	1:スピロテトラト	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
			4A	アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリド*	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴又は株元土壌混和 ○植穴土壌混和	
			4A	モスピラン粒剤	1:アセタミプリド*	0.5g/株	定植時	1回	普	△		
			発病初期	9B	チェス顆粒水和剤	1:ピトロジン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○葉害等(注)(本冊P.26)
		9B		コルト顆粒水和剤	1:トリフルキナズン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
		23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法													
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項				
コナジラミ類	(防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布。	○ 無寄生苗を定植。 ○ 周辺雑草は発生源となるので、圃場内外の除草。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布 ○ 株元散布 ○ 25~50ml/株灌注、薬害等(注)(本冊P.26) ○ 25ml/株灌注			
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期	1回	普	△				
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	500倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	○				
				28		プレバゾンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回	普	△				
			発生前	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアエジン	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		○ 薬害等(注)(本冊P.26)		
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000~3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
				6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※				
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※				
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキサゾン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○				
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸クリセリド'2:スピノサト'	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミト'	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
				オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏~秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 被害果を除去。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺。	発生前	15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアスロン	2,000倍			収穫前日まで	3回以内
15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン					2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△				
18		ファルコンフロアブル	1:メキシフェノト'					2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○				
6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩					2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※				
28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジ'アミト'					2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
28		プレバゾンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール					1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル					2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※				
un		プレオフロアブル	1:ピリタリル					1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸クリセリド'2:スピノサト'					1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミト'					2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項(本冊)参照														

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
軟腐病	(防除上のポイント) ○ 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。 ○ 予防散布を徹底する。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。 ○ 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。	発病前初期	銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照									
黒腐病	(発生の特徴) ○ 強風雨は発病を助長する。 (防除上のポイント) ○ 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 排水を良くし、被害株は早めに処分する。 ○ 毎年多発する圃場には栽培しない。	発病前初期	銅剤及び混合剤の項参照									
黒斑細菌病	(発生の特徴) ○ 強風雨は発病を助長する。 (防除上のポイント) ○ 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 排水を良くし、被害株は早めに処分する。 ○ 毎年多発する圃場には栽培しない。	発病前初期	銅剤及び混合剤の項参照									
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病後は急速にまん延するので予防散布を徹底する。 ○ 低温(18~20℃)・多湿条件で発病する。 ○ 悪臭がないことで軟腐病と区別可能。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。 ○ 排水を良くする。 ○ 夏期に1か月程度、湛水する。	作付前	7	パレード20フロアブル	1:ピラシフルミド	100倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ はなやさい類で登録	
			発病前初期	1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意 ○ 薬剤選択注意 ○ はなやさい類で登録 ○ はなやさい類で登録 ○ はなやさい類(ブロッコリーを除く)で登録	
			1	ベンレート水和剤	1:ベンゾ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△			
			7	アフエットフロアブル	1:ベンチオピラト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			7	パレード20フロアブル	1:ピラシフルミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△			
			11	スクレアフロアブル	1:マンデストロピン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○			
11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△						
べと病	(発生の特徴) ○ 多湿条件で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が低下した時に多発しやすい。	○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥切れしないようにする。	発病初期	21 11	ライメイフロアブル メジャーフロアブル	1:アミスブルム 1:ピコキシストロビン	2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内	普 普	△ △	○ はなやさい類(ブロッコリーを除く)で登録	
根こぶ病	(発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 ○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○ 本菌の生存期間は約5~7年、水中では約2年間。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 多発ほ場での作付を避ける。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。 ○ 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。	床土消毒	土壌病害虫防除法の項(本冊)参照									
			作付前	29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 100~150ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 ○ かぶれ注意 ○ 全面土壌混和 ○ 使用方法(注)(本冊P.27) ○ 全面土壌混和	
			36	ネビリユウ	1:フルスルファミド	20~30kg/10a	定植前	1回	普	○※			
			21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスブルム	200~500倍	定植前	1回	普	△※			
21	オラクル粉剤	1:アミスブルム	30kg/10a	定植前	2回以内	普	○※						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。	発生前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	4~6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和 ○ 株元散布 合ピレ(注)本冊(P.15)
				3A		ガードベイトA	1:ベルマトリン	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ。 ○ ダイコンアブラムシは早春から初夏、モモアカアブラムシは春と秋に多い。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布 ○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半	1回	普	△	
			発生初期	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	1g/株	定植時	1回	普	△	
				1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000~3,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
				3A		アディオソ乳剤	1:ベルマトリン	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	
4A		モスピラン顆粒水溶剤		1:アセタミプリト*	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△				
4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△					
9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキサゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
アオムシ	(発生の特徴) ○ 標準和名は、モンシロチョウ。 ○ 春~初夏及び10~11月に被害が多い。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		プレバソフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	100倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27) ○ 使用方法(注)(本冊P.27) ○ 株元散布
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリト*	0.5~1g/株	定植前日~定植当日	1回	普	△	
			発生初期	1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				28		プレバソフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド*	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		プロフレアSC	1:プロフラニリト*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:フロトキン	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○					
BT剤(本冊)参照													
コナガ	(発生の特徴) ○ 春~初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬季も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。	○ 次世代の増殖源となる収穫残渣の早期処分。発生放任圃場を作らない。	前発生	28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27) ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				6		アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド*	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△※	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド*	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		プロフレアSC	1:プロフラニリト*	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:フロトキン	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○					
BT剤(本冊)参照													

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	28 un 22B		フェニックス顆粒水和剤 プレオフロアブル アクセルフロアブル BT剤(本冊)参照	1:フルベンジアミド 1:ピリタリル 1:メタフルミジン	2,000~4,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	△ △ ○	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○年5~6回の発生、被害は9~10月に集中する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		バリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.27)
			発生初期	6 30 30 un		アニキ乳剤 グレーシア乳剤 プロフレアSC プレオフロアブル	1:レピメクチン 1:フルキサメタミド 1:プロフラニト 1:ピリタリル	1,000~2,000倍 2,000~3,000倍 2,000~4,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫3日前まで	3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普	△※ △ △ △	○はなやさい類で登録 ○はなやさい類で登録
ハイマダラノメイガ	(発生の特徴) ○別名(ダイコンシンクイムシ)。 ○夏期の高温少雨で多発する。 ○7~10月に発生が多くなる。 ○幼虫は、生長点付近を食害する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

[6]非結球レタス

非結球レタス

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法											
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項	
萎黄病	(発生の特徴) ○ヒメフタテンヨコバイが媒介するファイトプラズマ病。 ○年内取りの作型に発生が多い。	(耕種的防除法) ○育苗中は寒冷紗などの被覆により媒介虫ヒメフタテンヨコバイの飛来防止。 ○シルバーポリなどによる畝マルチも媒介虫の飛来防止に有効。 ○発病株は早めに除去。												
軟腐病	(防除上のポイント) ○ヨトウムシ類などの食害部から病原細菌が侵入するのでこれらの害虫を防除。	○発病圃場では連作をしない。 ○排水不良を改善。 ○傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。	結球始め～結球中期 銅剤及び混合剤の項、微生物農薬(本冊)の項参照											
			発病初期											
					U18 31 31+24 31+M1	バリダシン液剤5 スターナ水和剤 カセット水和剤 ナレート水和剤	1:バリダマイシン 1:オキソリニック酸 1:オキソリニック酸2:カスガマイシン 1:オキソリニック酸2:有機銅	800倍 2,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ △ ×	○トマト・きくへの飛散注意。	
斑点細菌病	(防除上のポイント) ○被害株(葉)を圃場に放置しない。	○苗は軟弱徒長にせず、できるだけ傷をつけない。	時定植		P2	オリゼメート粒剤	1:プロベナゾール	6～9kg/10a	定植時	1回	普	△	○土壌混和	
			発病初期		24+M1 24+M1 31+24 31+M1	カスミンボルドー 銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 銅剤及び混合剤の項(本冊)参照	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:オキソリニック酸2:カスガマイシン 1:オキソリニック酸2:有機銅	1,000倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内 4回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ △ ×		
腐敗病	(発生の特徴) ○凍霜害は発生を助長。 ○悪臭がないことで軟腐病と区別可能。	○苗は軟弱徒長にせず、できるだけ傷をつけない。 ○マルチ等により多湿条件を緩和。	時定植		P2	オリゼメート粒剤	1:プロベナゾール	6～9kg/10a	定植時	1回	普	△	○土壌混和	
			発病初期		24+M1 24+M1 U18 31+24 31 31+M1	カスミンボルドー 銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 バリダシン液剤5 カセット水和剤 スターナ水和剤 ナレート水和剤	1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスガマイシン2:塩基性塩化銅 1:バリダマイシン 1:オキソリニック酸2:カスガマイシン 1:オキソリニック酸 1:オキソリニック酸2:有機銅	1,000倍 1,000倍 800倍 1,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫30日前まで	4回以内 4回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普	△ △ △ △ △ ×	○トマト・きくへの飛散注意。	
菌核病	(防除上のポイント) ○発病後は急速にまん延するので、予防散布を徹底。	○発病株は早期除去、菌核を圃場に残さない。	前発病		7	パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド'	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.26)	
			発病初期		1 11 11 11 7 7 7	トップジンM水和剤 アミスター20フロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 スクレアフロアブル カンタストドライフロアブル アフェットフロアブル パレード20フロアブル	1:チオファネートメチル 1:アゾキシストロピン 1:ピリベンカルブ 1:マンデストロピン 1:ボスカリト' 1:ベンチオピラト' 1:ピラジフルミド'	1,500～2,000倍 2,000倍 2,000～3,000倍 2,000倍 1,000～1,500倍 2,000倍 2,000～4,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 4回以内 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	△ △ △ ○ △ △ △	○薬剤選択注意 ○薬害(注)(本冊P.26) ○薬害(注)(本冊P.26) ○使用方法(注)(本冊P.26)	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○葉の基部、下葉に発生しやすい。 ○地際、葉の基部が侵されると萎れる場合がある。 ○褐変部分には灰色のかびを生じる。	○マルチ等により多湿条件を緩和。 ○発病株は早めに抜き取り、土中に埋め込む等の処理を行い、伝染源としない。	発病初期		NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ナトリウム	800倍	収穫前日まで	—	普	△	○薬剤選択注意 ○使用方法(注)(本冊P.26) ○使用方法(注)(本冊P.26)
						トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500～2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
						カンタスドライフロアブル	1:ボスカリト'	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
						アフェットフロアブル	1:ベンチオピラト'	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						パレード20フロアブル	1:ピラジフルミト'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ジオゼット水和剤	1:ポリオキシシンド亜鉛塩	500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
						微生物農薬の項(本冊)参照							
すそ枯病	(防除上のポイント) ○発病初期に、株元にもよくかかるよう散布。	○深植えしない。 ○密植は発病を助長するので適切な株間にする。	発病前		29	フロンサイド粉剤	1:フルアジナム	30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○全面土壌混和、かぶれ注意 ○100～150ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和かぶれ注意
						フロンサイドSC	1:フルアジナム	500ml/10a	定植前	1回	普	×	
すそ枯病			発病初期		U18	バリダシン液剤5	1:バリダマイシン	800倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
						アフェットフロアブル	1:ベンチオピラト'	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						パレード20フロアブル	1:ピラジフルミト'	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○主要種はモモアカアブラムシとヒゲナガアブラムシ類。 (防除上のポイント) ○抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用不可。	○育苗中は寒冷紗等の被覆で有翅虫の飛来防止。 ○シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	4A	4A	ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元処理 ○使用方法(注)(本冊P.26) ○株元散布 ○使用方法(注)(本冊P.26) ○使用方法(注)(本冊P.27)、回数注意 ○使用方法、混用(注)(本冊P.27)、回数注意 ○使用方法(注)(本冊P.26) ○株元散布 ○使用方法(注)(本冊P.26) ○使用方法(注)(本冊P.26) ○植穴土壌混和 ○植穴土壌混和
						ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半	1回	普	△	
						アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	
						ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	
						アベイル粒剤	1:アセタミプリト'2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
						ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	
						ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	
						モスピラン粒剤	1:アセタミプリト'	0.25～0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	
						アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	
						スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	
キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロール2:ジノテフラン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△							
アブラムシ類				4A	4A	アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	
						スタークル粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	定植時	1回	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	4A	39	アドマイヤーフロアブル	1:イダクロプリド'	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意 ○ 眼に刺激痛、かぶれ注意 ○ 葉害(イネ)
				4A		モスピラン 顆粒水溶剤	1:アセタミプリド'	4,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル 顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン 顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				14		リーフガード 顆粒水和剤	1:チオシクラム	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				21A		ハチハチフロアブル	1:トルフェンピラト'	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	×	
				29		ウララDF	1:フロニカミド'	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		コルト 顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	3,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
23	モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○						
気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照													
シメコフバタイ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆で飛来を防止。 ○ シルバーポリ等の畝マルチも飛来防止に有効。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(本冊P.27)、回数注意
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除き見られる。5～9月に異常発生することがある。	○ 前作や作付前の雑草で生育した幼虫が加害することが多い。作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。	発生前	1B		カルホス粉剤	1:イクサチオン	6kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	△	○ 土壌表面散布土壌混和处理 ○ 土壌表面散布土壌混和处理 ○ 土壌表面株元処理 ○ 使用方法(注)(本冊P.27)、登録はカブラヤガ
				1B		カルホス微粒剤F	1:イクサチオン	6kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	劇	△	
				28+4A		ネキリエースK キックオフ 顆粒水和剤	1:イクサチオン 1:クロラントラニプロール2:ジノテフラン	3kg/10a 100倍	は種時又は定植時 定植前日～定植時	2回以内 1回	普 普	△ △	
			発生初期	22B		アクセルベイト	1:メタフルジン	3～6kg/10a	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		ガードベイトA	1:ペルメリン	3kg/10a	生育初期(但し、収穫14日前まで)	2回以内	普	○*	
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生前	28		プレバゾンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド'2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはベーパーポット1冊	1回	普	○	○ 使用方法(注)(本冊P.27)、回数注意	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法																	
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項								
ヨトウムシ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		発生初期	1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照							
				1B		ジェイエース水溶剤	1:アセフェート	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○								
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト*	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△								
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミト*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△								
				28		プレバソフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△								
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△								
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ*	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○								
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△								
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタト*	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△								
				30		プロフレアSC	1:プロフランリト*	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△								
							BT剤の項(本冊)参照													
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(本冊P.27)、回数注意 ○ 使用方法(注)(本冊P.27)							
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△								
			発生初期	18		ファルコンフロアブル	1:外キシフェノジト*	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照							
				15		ノーモルト乳剤	1:テフルベンシロン	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△		○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照						
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△			○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照					
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノジト*	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○				○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照				
				6		アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※					○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照			
				6		アニキ乳剤	1:レピクチン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※						○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照		
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△							○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△								○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ*	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○								
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタト*	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照											
			BT剤の項(本冊)参照																	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード ¹⁾	FRAC コード ²⁾	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
オオタバコガ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生前	28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド ²⁾ 2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○使用方法(注)(本冊P.27)、回数注意
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロール2:ジノテフラン	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.27)
			発初期	15		マッチ乳剤	1:ルフェスロン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノジド ¹⁾	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:外キシフェノジド ¹⁾	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				6		アフーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト ¹⁾	2,500～5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド ¹⁾	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨールバルフロアブル	1:テトラニプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				22A		トルネードエースDF	1:イントキサカルブ ¹⁾	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド ¹⁾	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
30		プロフレアSC	1:プロフランリド ¹⁾	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△					
					BT剤の項(本冊)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ナモグリバエ	(発生の特徴) ○ 春と秋に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ マメ科、アブラナ科作物が周辺部にある場合は発生に注意。	○ 育苗中は寒冷紗等の被覆によって成虫の飛来を防止。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は成虫の飛来抑制に有効。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	15g/培土0	は種前	1回	普	×	○ 床土混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	15g/培土10	は種前	1回	普	△	○ 培土混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	15g/培土10	は種前	1回	普	△	○ 培土混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト'	500~1,000倍	定植前まで	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	100倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(本冊P.27)、回数注意
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				4A+28		アペイル粒剤	1:アセタミプリト'2:シアントラニプロール	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半~定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(本冊P.27)、回数注意
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニプロール	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリト'	0.5g/株	定植前日~定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50~100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)	
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	50~100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)	
			28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニプロール2:ジノテフラン	100倍	定植前日~定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(本冊P.27)	
			発生初期	4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アフーム乳剤	1:エマメクシン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
28		ヨーバルフロアブル		1:テトラニプロール	2,500~5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△				
21A	39	ハチハチフロアブル		1:トルフェンピラト'	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意			
14		パダンSG水溶剤		1:カルタップ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意			
30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタト'	2,000~3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△					
カナタメクジムジリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害。	○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分。 ○ 通風をよくする。		un		スラゴ	1:磷酸第二鉄	1~5g/m ²	発生時	-	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置
			14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオンクラム	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	○ 登録はナメクジ類 薬剤選択注意	
			14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意	
						銅剤及び混合剤の項(本冊)参照 メタアルデヒド剤(本冊)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
類センチュウ	(発生の特徴) ○ 主要種はネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ類。		(耕種的防除法) ○ 対抗植物の利用。										
			土壌病害虫防除法の項参照										
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はゴボウヒゲナガアブラムシ。 ○ 初夏と秋に多発。		時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イタダクプロ®	4kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
			発 生 初 期	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イタダクプロ®	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布 ○ 株元散布
				1B		オルトラン粒剤	1:アセフェート	3~6kg/10a	収穫75日前まで	1回	普	○	
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000~2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				1B		マラソン乳剤	1:マラソン	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	
				1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,000倍	収穫45日前まで	1回	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イタダクプロ®	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○					
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除き見られ、5~9月に異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。	発 生 前	1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 播溝土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15)
				1B		ダイアジノン粒剤5	1:ダイアジノン	4kg/10a	は種時	1回	普	×	
				3A		フォース粒剤	1:テフルリン	4kg/10a	は種時	1回	劇	×	
				1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	は種時~出芽前	1回	普	△	
			発 生 初 期	3A		ガードバイトA	1:ヘルメリン	3kg/10a	は種後~発芽前	5回以内	普	○*	○ 土壌表面散布 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 株元散布 合ピレ(注)(本冊P.15) ○ 土壌表面株元処理 ○ 株元散布
				1B		ネキリエースK	1:イキサチオン	3kg/10a	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
				1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	収穫30日前まで	4回以内	普	△	
				3A		ガードバイトA	1:ヘルメリン	3kg/10a	は種時~生育初期	5回以内	普	○*	
ヒヨウタンゾウムシ類	(発生の特徴) ○ ニンジン、ラッカセイ、ネギ、ダイコン、ホウレンソウ等多数の作物を加害。	○ イネ科作物との輪作。 ○ キク科、タデ科雑草の除草を徹底。	発 生 前	1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 播溝土壌混和 ○ 土壌表面散布
				1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	は種時~出芽前	1回	普	△	
			発 生 初 期	1B		トクチオン粉剤	1:プロチオホス	6kg/10a	生育初期(但し収穫90日前まで)	4回以内	普	△	○ 散布 ○ 株元散布 ○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				1B		トクチオン細粒剤F	1:プロチオホス	6kg/10a	収穫30日前まで	4回以内	普	△	
				3A		アグロスリン乳剤	1:シヘルメリン	2,000倍	収穫14日前まで	5回以内	劇	×	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
褐色腐敗病	(発生の特徴) ○病斑はいもの表面が楕円形に陥没し、黒褐変して奇形となる場合がある。 ○いもの腐敗が激しい場合は成育後期に下葉が早く黄化し枯れ上がる。	○種いもは健全なものを用いる。 ○窒素肥料の追肥多用で発生が助長されるので適正な肥培管理を行う。 ○連作で発生は拡大するので作物残さや特に被害いもは圃場外で処理する。 ○排水不良地で多発するので滞水するところは排水対策を行う。	種いもの消毒	いも類の種子消毒の項(本冊)参照									
			床土、本圃の土壤消毒	土壤病害虫防除法の項(本冊)参照									
			植付前		29	フロンスайдSC	1:フルアジナム	500ml/10a	植付前	1回	普	×	○全面散布土壤混和(散布液量100~200ℓ/10a)
葉渋病	(防除上のポイント) ○発病初期の防除を徹底する。	○支柱栽培を行う。 ○被害茎葉は集めて処分し支柱は消毒する。	8 梅月	29	フロンスайдSC	1:フルアジナム	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	×	○かぶれ注意 ○かぶれ注意 ○葉害等(注)(本冊P.26) ○葉害等(注)(本冊P.26)	
			雨	29	フロンスайд水和剤	1:フルアジナム	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	×		
			中旬	M7	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△		
			及び	M7	ベルコート水和剤	1:ミノクタジナルベシル酸塩	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△		
			降	11	ストロビーフロアブル	1:クレソキシメチル	2,000~3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
				11	アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				3	オンリーワンフロアブル	1:テフコナゾール	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
青かび病	(発生の特徴) ○いも内部まで暗褐色に腐敗する。 ○亀裂した病斑には青緑色のかびを生じる。	○収穫時期が遅れないようにする。 ○収穫時になるべく傷をつけないようにする。 ○芋の貯蔵は湿度を保ち乾燥させない。 ○貯蔵前に湿度100%、20~25℃、10日間のキュアリング処理を行う。	種いもの消毒	いも類の種子消毒の項(本冊)参照									
炭疽病	(防除上のポイント) ○発病初期の防除を徹底する。 ○下葉や葉裏にも薬液が十分付着するようにする。	○急激な肥切れを起こさないよう適度に追肥する。	梅雨期直前	M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫30日前まで	6回以内	普	×		
			直前	M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンセフ*	400~600倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△		
			直前	M3	ベンコゼブ水和剤	1:マンセフ*	400~600倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△		
			直前	M7	ベルコートフロアブル	1:ミノクタジナルベシル酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△		
			直前	1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△		
			直前	1	ベンレート水和剤	1:ペノマル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			直前	1+M3	ラビライト水和剤	1:チオファネートメチル2:マンネブ*	400倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△		
			直前	11	アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			直前	11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
			直前	3	オンリーワンフロアブル	1:テフコナゾール	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△		
			銅剤及び混合剤の項(本冊)参照										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ア ブ ラ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はジャガイモヒゲ ナガアブラムシ、ワタアブラム シ。 ○ 雑草にも寄生し発生源とな るので、圃場内や周辺を除 草する。	○ 雑草にも寄生し発生源とな るので、圃場内や周辺を除 草する。	萌芽 期	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	6kg/10a	萌芽期	1回	普	×	○ 株元散布
			発 生 初 期	3A		アディオソ乳剤	1:ペルメリン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		トレボンEW	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水溶剤	1:ピリフルキサゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26)
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,000倍	収穫45日前まで	1回	普	△					
21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、皮膚かぶれ				
ト シ ウ イ チ モ ジ ヨ	(発生の特徴) ○ 4～10月に数回発生する。春 から秋に高温少雨であると多 発する。蛹で越冬する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。。		発 生 初 期	3A		トレボン粉剤DL	1:エトフェンプロックス	4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
						BT剤の項参照							
ヤ マ ノ イ モ コ ガ	(発生の特徴) ○ 6～7月に発生が多い。 ○ 幼虫は老熟すると、葉裏や 支柱などで網目状のまゆを つくる。	○ 肥培管理を適正にし、過繁 茂にしない。 ○ 密植栽培を避け、風通しを 良くする。	発 生 初 期	1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,000倍	収穫45日前まで	1回	普	△	
				3A		アディオソ乳剤	1:ペルメリン	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
						BT剤の項参照							
ナ ガ イ モ コ ガ	(発生の特徴) ○ 6～7月に発生が多い。 ○ 新芽と新葉を食害する。幼虫 は芽の中に潜んでいるので 見つけにくい。	○ 肥培管理を適正にし、過繁 茂にしない。	発 生 初 期	15		アタプロン乳剤	1:クロフルアスロン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(本冊P.15)
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				28		フェニックス顆粒水溶剤	1:フルベンジアミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26)
				3A		スカウトフロアブル	1:トラメトリン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△※	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		マブリックEW	1:フルハリネート	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、皮膚かぶれ
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9 ～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団 を寄生葉ごと摘除し、処分 する。	発 生 初 期	18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノジド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(本冊P.15)
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26)
						BT剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
シコ 類ガ 幼ネ 虫ム	(発生の特徴) ○成虫は6月中旬～7月下旬頃 が発生のピークとなる。幼虫 は7月頃から発生する。		植 付 時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリド	4kg/10a	植付時	1回	普	△	○植溝土壌混和。登録はコガネムシ類
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6～9kg/10a	植付時	1回	普	△	○作条土壌混和、登録はコガネムシ類
ハ ダ ニ 類	(発生の特徴) ○高温乾燥時に発生。	○発芽前に畦畔雑草を除 草。	発 生 初 期	6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○登録はカンザワハダニ
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ピフェナゼート	1,000倍	収穫3日前まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:シフルトフェン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
センチュウ類	○健全な種いもを使用。		土壌病害虫防除法の項(本冊)参照										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○主にBYMVによる。 ○虫媒(アブラムシ類)伝染。低率で種子伝染もする。 ○圃場内では散在して発生することが多い。 (防除上のポイント) ○アブラムシ類を防除する。		(耕種的防除法) ○無病種子を用いる。 ○初期の発病株を除去する。 ○アブラムシ類の飛来防止に努める。 ○圃場周辺の雑草を除去する。										
			アブラムシ類の項参照										
苗立枯病	(発生の特徴) ○ピシウム属菌又はリゾクトニア属菌により被害を生じる。	○床土は無病土を使用する。	は種後～	アブラムシ類の項参照									
立枯病			床土、本圃の土壤消毒	アブラムシ類の項参照									
			発病前～発病初期		32	タチガレン液剤	1:ヒドロキシイキサザールカルウム	500倍	は種後及び生育期 但し、は種後1～2 か月後まで	3回以内	普	△	○希釈液200ml/株を播種穴 又は株元に土壤灌注
茎腐病	(発生の特徴) ○本病は地際部が黒褐色に変色し、くもの巣状のかびを生じる。	○発病株は早期に除去する。	発病前～発病初期		14	リゾレックス水和剤	1:トルクロホスメチル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○10/m ² の土壤灌注
褐斑病	(防除上のポイント) ○本病は、みかんのそばかす病の原因となるので、みかん園の近くでは収穫後速やかに茎葉を取り除き処分する。	○無病種子を用いる。 ○肥沃で排水良好な土地を選ぶ。 ○リン酸・カリ肥料を十分に施して強健に育てる。	病発初期前 発		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
うどんこ病	(発生の特徴) ○収穫期に雨が多い年に発生が増加する。 (防除上のポイント) ○発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。	○被害残さを圃場内に残さないようにする。 ○発病した茎葉は速やかに除去する。 ○窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。 ○密植、株の過繁茂を避ける。	発病初期	M1	サンヨール	1:DBEDC	500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	○高温時薬害注意	
				3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△		
				3	ラリー水和剤	1:ミクロブ'タニル	4,000～8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○		
				NC	カリグリーン	1:炭酸水素カルウム	800～1,000倍	収穫前日まで	—	普	○		
				NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ナトリウム	800～1,000倍	収穫前日まで	—	普	△		
						くん煙剤の項(本冊)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○低温(20℃以下)、多湿条件で発生する。 (防除上のポイント) ○輸送中等にも発病するので、出荷にあたっては被害莢は丁寧に取り除く。	○花卉・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○密植を避け風通しを良くする。	発病前 〜 発病初期		MI 2 10+1 10+1 11 11 11 NC NC 7 7	サンヨール	1:DBEDC	500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	○高温時葉害注意 ○薬剤選択注意 ○薬剤選択注意 ○葉害等(注)
						ロブラール水和剤	1:イプロシオン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ゲッター水和剤	1:ジエトフェンカルブ ² :チオファネートメチル	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ニマイバー水和剤	1:ジエトフェンカルブ ² :ベノミル	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
						アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						スクレアフロアブル	1:マンデストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ナトリウム	800倍	収穫前日まで	—	普	△	
						カリグリーン	1:炭酸水素カリウム	800~1,000倍	収穫前日まで	—	普	○	
						パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△							
アブラムシ類	(発生の特徴) ○主要種はエンドウヒゲナガアブラムシ。 ○ウイルス病を媒介する。 ○春季に発生が増加し、新梢、花卉、さや等に群生する。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生初期	1B 1B 3A 4A 4A 4A 4A		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000~2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○葉害等(注) ○葉害等(注) ○合ピレ(注)
						ダイアジノン乳剤40	1:ダイジノン	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	劇	×	
						アディオン乳剤	1:ベルトリン	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
						モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
						ダントツ水溶剤	1:クロチアエニジン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
						スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△							
カメムシ類	(発生の特徴) ○開花期から収穫期にかけて、不稔、奇形粒等を発生させる。		発生初期	1B 1B 4A 4A		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○葉害等(注)
						スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
						スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ミウラナミシジ	(発生の特徴) ○年内早出しに被害が多く、秋期に多発する。 (防除上のポイント) ○開花初期から2~3回散布する。		着蕾 開花期 初〜 期	3A 3A 3A 14 4A 4A		アディオン乳剤	1:ベルトリン	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○合ピレ(注) ○合ピレ(注) ○合ピレ(注)
						トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	
						トレボンEW	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	
						パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
						スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△							
ダシロメイチモジマ	(発生の特徴) ○ふ化幼虫が莢内に食入し、子実を食害する。 ○年4世代程度発生する。		発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○葉害等(注)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
クマイメギン	(発生の特徴) ○年1～2回発生し、ふ化幼虫が莢に食入して子実を加害する。	○連作を避ける。	発生初期	1B 1B 3A		スミチオン乳剤 マラソン乳剤 アディオン乳剤	1:MEP 1:マラソン 1:ペルメリン	1,000～1,500倍 1,000倍 3,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで	4回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ×	○薬害等(注) ○合ピレ(注)
ジシロイトウチモ	(発生の特徴) ○若齢幼虫期は集団で葉裏から食害し、白変葉になる。	○卵塊及びふ化幼虫は捕殺する。	発生初期	3A 3A 15 un		トレボン乳剤 トレボンEW カスケード乳剤 プレオフロアブル BT剤(参考資料)参照	1:エトフェンプロックス 1:エトフェンプロックス 1:フルフェノクスロン 1:ピリタリル	1,000倍 1,000倍 4,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普	× × △ △	○合ピレ(注) ○合ピレ(注) ○IGR剤(注)
ウハスモンヨト	(発生の特徴) ○年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○卵塊及びふ化幼虫は捕殺する。	発生初期	15 18 13 5 un		カスケード乳剤 マトリックフロアブル コテツフロアブル ディアナSC プレオフロアブル BT剤(参考資料)参照	1:フルフェノクスロン 1:クロマフェノジト 1:クロルフェナピル 1:スピネトラム 1:ピリタリル	4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 劇 普 普	△ ○ △※ △ △	○IGR剤(注) ○IGR剤(注)
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○若齢幼虫は集団で表皮を残して加害し、その後分散する。	○分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。	発生初期	3A		トレボン乳剤 BT剤(参考資料)参照	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○合ピレ(注)
類アザミウマ	(発生の特徴) ○子房への産卵による白ぶくれ症を引き起こす。	○圃場周辺の雑草にも寄生しているため除草する。	発生初期	1B 3A 4A 5		マラソン乳剤 アディオン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 ディアナSC	1:マラソン 1:ペルメリン 1:アセタミプリト 1:スピネトラム	1,000～3,000倍 3,000倍 4,000倍 2,500～5,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内	普 普 劇 普	△ × △ △	○合ピレ(注)
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○4～11月に発生し、蛹や成虫で越冬する。	○圃場周辺の除草を徹底する。	発生初期	1B 3A 4A 4A 4A 4A 5 28		マラソン乳剤 アディオン乳剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル粒剤 アルバリン粒剤 ディアナSC プレバゾンフロアブル5	1:マラソン 1:ペルメリン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:スピネトラム 1:クロラントラニリプロール	1,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 9kg/10a 9kg/10a 2,500～5,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 生育期但し、収穫開始14日前まで 生育期但し、収穫開始14日前まで	3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回 1回 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 普	△ × △ △ △ △ △	○合ピレ(注) ○株元散布 ○株元散布
バナエモグリ	(発生の特徴) ○多発すると葉が白い袋状になり減収する。		発生初期	3A 14 21A	39	スカウトフロアブル バダンSG水溶剤 ハチハチフロアブル	1:トラロメリン 1:カルタップ 1:トルフェンピラト	1,500倍 1,500～3,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内	劇 劇 劇	× × ×	○合ピレ(注) ○眼に刺激痛
シコ類ガネム	(発生の特徴) ○主要種はドウガネブイブイ。 ○幼虫が根部を食害し、生育遅延や枯死を引き起こす。	○過度な未熟堆肥の施用は避ける。	発生初期	1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
ハダニ類	(発生の特徴) ○前作の残渣や周辺雑草が発生源となることが多い。	○前作の残渣や圃場に放置しない。	発生初期	21A 13		ダニトロンフロアブル コテツフロアブル	1:フェンピロキシメト 1:クロルフェナピル	1,000～2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 2回以内	普 劇	× △※	○殺卵効果主体

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法												
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項		
病苗立枯		○床土は無病土を使用する。													
いもち病	(発生の特徴) ○過繁茂の状態が降雨が続くと発生が多くなる。	○密植を避け、風通しをよくする。 ○病葉を摘みとり処分する。	発病初期		11+4 1	ユニフォーム粒剤 ベンレート水和剤	1:アゾキシストロビン2:メタラキシルM 1:べノバル	18kg/10a 1,000倍	収穫30日前まで 収穫21日前まで	3回以内 2回以内	普 普	△ △	○薬剤選択注意		
紋枯病	(発生の特徴) ○病勢が進むと根茎も侵されることがある。	○無病種子を用いる。 ○排水を良くする。 ○病株を除去する。	発病初期		U18 7	バリダシン液剤5 モンカットフロアブル40	1:バリダマイシン 1:フルトラニル	800倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫3日前まで	4回以内 6回以内	普 普	△ △	○トマト・きくへの飛散注意。		
根茎腐敗病	(発生の特徴) ○本病は腐敗するが悪臭を伴うことはない。 (防除上のポイント) ○発病すると薬剤の効果は著しく劣る。	○排水を良くする。 ○無病圃場から採種したものを植え付ける。	本圃消毒 土壌病害虫防除法の項(本冊)参照												
			前植付		M4	オーソサイド水和剤80	1:キャプタン	塊茎重量の2%	植付前	1回	普	×	○塊茎粉衣		
			発病前		21	ランマンフロアブル	1:シアゾファミド	500~1,000倍	生育期(但し収穫30日前まで)	3回以内	普	△	○30/m ² 土壌灌注		
					11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロビン2:メタラキシルM	18kg/10a	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○定植前作条土壌混和又は生育期土壌表面散布		
					28	ブレビクールN液剤	1:プロパモカルブ塩酸塩	400~600倍	生育期(但し、収穫30日前まで)	5回以内	普	○	○30/m ² 土壌灌注		
	21	オラクル顆粒水和剤		1:アミスプロム	2,000倍	生育期(但し、収穫3日前まで)	3回以内	普	△※	○10/m ² 土壌灌注					
	M4	オーソサイド水和剤80	1:キャプタン	400倍	収穫30日前まで	2回以内	普	×	○30/m ² 灌注						
アワノメイガ	(発生の特徴) ○幼虫は新葉を加害した後、茎内を食い荒らし心枯れを引き起こす。 (防除上のポイント) ○新葉にカスリ状の被害痕が見え始めた頃から、2、3回防除する。	○枯死茎は早めに処分する。 ○とうもろこし圃場の近くでは栽培を避ける。	生育期	1B 3A 14 22A		オルトラン水和剤 スカウトフロアブル パダンSG水溶解剤 トルネードエースDF	1:アセフェート 1:トラロトリン 1:カルタップ 1:インドキサカルブ	1,000倍 1,500倍 1,500倍 2,000倍	収穫45日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 5回以内 5回以内 3回以内	普 劇 劇 普	△ △※ ×	○合ピレ(注)		
ウハスモンヨト	(発生の特徴) ○年5~6回発生し、9~10月の被害が多い。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○卵塊及びふ化幼虫は捕殺する。	発生初期	18 22A 22B 13 un 30		ロムダンフロアブル トルネードエースDF アクセルフロアブル コテツフロアブル プレオフロアブル グレースシア乳剤	1:テプフェンジド 1:インドキサカルブ 1:メタフルミジン 1:クロルフェナピル 1:ピリタリル 1:フルキサメタミド	2,000倍 2,000倍 1,000~2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000~3,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 普 普	○ ○ ○ △※ △ △	○IGR剤(注)		
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○主要種はカブラヤガ。 ○萌芽初期に茎の地際を食害する。	○被害株の株元を掘り起こし幼虫を捕殺する。 ○高畦にして移動を防ぐ。	萌芽期	3A 3A		フォース粒剤 ガードバイトA	1:テフルトリン 1:べノバル	6~9kg/10a 3kg/10a	萌芽期 定植時~萌芽期(但し、収穫120日前まで)	1回 4回以内	劇 普	×	○株元散布合ピレ(注) ○株元散布合ピレ(注)		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
青枯病	○赤しそでは刈刃を通して収穫時に二次伝染する。	○連作しない。 ○発病株は直ちに抜きとり圃場内に放置しない。 ○排水を良くする。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
さび病	(発生の特徴) ○葉裏に黄色の円形病斑を生じ、のちに表皮が破れて黄色の夏胞子を生じる。 (防除上のポイント) ○早期発見に努め、発生初期に重点的に防除する。	○耐病性品種を栽培する。 ○健全苗を使用する。 ○病葉を発生初期に摘み取り処分する。 ○連作は避ける。 ○窒素肥料の偏用・肥切れさせないよう適正な施肥管理を行う。 ○排水を良くし、多湿にしない。	日収穫前まで開始 10		3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	5,000倍	収穫開始 10日前まで	3回以内	普	△	
			発生初期		3 3 11	サブロール乳剤 ラリー乳剤 アミスター20フロアブル	1:トリホリン 1:ミクロブタニル 1:アゾキシストロビン	1,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	△ ○ △	
病そうか	(発生の特徴) ○5~7月の多雨期に発生が多い。	○健全種子を用いる。 ○被害株は早期に除去する。											
斑点病	(発生の特徴) ○パック内で円形~不整形の黒色斑点症状となる(市場病害)。	○被害茎葉は早期に除去する。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	○株元散布(1500/10a)
					11 7	ストロビーフロアブル アフエットフロアブル	1:クレソキシムメチル 1:ペンチオピラト	4,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫3日前まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	○薬害等(注)(本冊P.26) ○銅剤は葉に葉液がかからないよう株元へ散布。
アブラムシ類	(発生の特徴) ○エゴマアブラムシ、ワタアブラムシなどが寄生する。 ○寄生葉では葉の縮れや巻き込みなどの奇形が生じる。 (防除上のポイント) ○発生初期に葉裏を重点的に丁寧に散布する。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生初期	3A		アデオン乳剤	1:ベルトリン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		アグロスリン乳剤	1:シペルトリン	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	○合ピレ(注)(本冊P.15)
			4A		アドマイヤーフロアブル	1:ミダクロプリド	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△		
			4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△		
			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
			4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
			4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○		
ハダニ類	(防除上のポイント) ○同一系統の薬剤の連用を避ける。	○近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。 ○寄生を受けた雑草の刈払いなどは、ハダニの離脱や移動も考慮し適切に実施する。	発生初期	21A		ダニトロンフロアブル	1:フェンピロキシメト	2,000倍	収穫28日前まで	1回	普	×	
				21A		サンマイトフロアブル	1:ピリダベン	2,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	×	
			6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※		
			6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※		
			25A		スターマイトフロアブル	1:シエピラフェン	2,000倍	収穫3日前まで	1回	普	△		
			25B		ダニコングフロアブル	1:ピフルアミド	2,000倍	収穫3日前まで	1回	普	△		
			25A		ダニサラバフロアブル	1:シフルトフェン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○		
			20B		カネマイトフロアブル	1:アセキノシル	1,500倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○登録はカンザワハダニ	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項
ハ ス モ ン ヨ ト ウ	(発生の特徴) ○年5～6回の発生、被害は9 ～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。 8月中下旬の防除が重要で ある。	○卵塊や幼虫は見つけ次第 除去する。	発 生 初 期	15		カスケード乳剤 マトリックフロアブル カウンター乳剤 アフーム乳剤 フェニックス顆粒水和剤 プレバソソフロアブル5 プレオフロアブル	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				18			1:クロマフェノジト*	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	
				15			1:ノバルロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	
				6			1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	
				28			1:フルベンジジアミト*	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	
				28			1:クロラントラネリブ*ロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	
un	1:ピリタリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普							
ア ザ ミ ウ マ 類	(発生の特徴) ○ミナミキイロアザミウマ、モトジ ロアザミウマなどが発生す る。		発 生 初 期	3A		アディオン乳剤 スピノエース顆粒水和剤 モバントフロアブル パダソSG水溶剤 グレーシア乳剤	1:ヘルメリン	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○合ピレ(注)(本冊P.15) ○葉害等(注)(本冊P.26)
				5			1:スピノサト*	10,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	
				23			1:スピロテトラト*	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	
				14			1:カルタツ*	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	
				30			1:フルキサメタミト*	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	
センチュウ類						土壌病害虫防除法の項(本冊)参照						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
軟腐病	(発生の特徴) ○ 地際部が軟化、腐敗し、腐敗部からは悪臭を生じる。 ○ 後作のナス科、アブラナ科、ネギ類などにも発生する。	○ 土壌伝染するので、健全なほ場、用土を使用する。 ○ 連作は発病を助長するので、輪作を行う。 ○ 資材も伝染源となる。再利用の場合、洗浄・消毒を徹底する。 ○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。	発 病 前 初 期		31	スターナ水和剤	1:オキソリニック酸	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 葉害等(注)(本冊P.26)
根こぶ病	(発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 ○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○ 本菌の生存期間は約5~7年、水中では約2年間である。 (防除上のポイント) ○ 薬剤を土壌混和する場合は、土壌が乾燥時実施する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 多発での作付を避ける。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し適正に処分する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する(排水対策必須)。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
			播種前		21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスルフロム	200~300g/10a	は種前又は定植前	2回以内	普	△※	○ 100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和
			播種又は定植前		36 36 29	ネビジン粉剤 ネビジン粉剤 フロンサイド粉剤	1:フルスルフアミド 1:フルスルフアミド 1:フルアジナム	20~30kg/10a 20kg/10a 30~40kg/10a	は種又は定植前 は種又は定植前 は種又は定植前	1回 1回 1回	普 普 普	○※ ○※ △※	○ 全面土壌混和 ○ 作条土壌混和 ○ 全面土壌混和
白さび病		○ アブラナ科雑草にも発病するので除草を徹底する。 ○ 湿地を避け排水対策を行う。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ トンネル、ハウス栽培では換気に努める。 ○ 適切な栽植密度とする。 ○ 被害株は圃場外で適切に処分する。	定植時		11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロビン2:メタラキシルM	9kg/10a	定植前	1回	普	△	○ 全面土壌混和
			生育期		21 21 11 U17	ランマンフロアブル ライメイフロアブル アミスター20フロアブル ピシロックフロアブル	1:シアゾファミド 1:アミスルフロム 1:アゾキシストロビン 1:ピカルブトラグクス	2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普	△ △ △ ○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ア ブ ラ ム シ 類	(発生の特徴) ○モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが発生する。 ○モモアカアブラムシは春と秋、ダイコンアブラムシは春、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝処理土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○株元散布
			発生初期	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	6kg/10a	定植時	1回	普	×	○作条混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○作条処理土壌混和
				3A		アグロスリン乳剤	1:シペルトリン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		スカウト乳剤	1:トラロトリン	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	○合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		スカウトフロアブル	1:トラロトリン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○					
コ ナ ジ ラ ミ 類		○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○施設栽培では、近紫外線カットフィルム被覆が侵入抑制に有効である。 ○施設栽培では、成虫の侵入を防止するため、開口部をネット被覆する(1mm目以下(0.6mm目以下が望ましい))。 ○施設栽培では、開口部近くに黄色粘着トラップを設置すると侵入抑制に有効である。											
ネ キ リ ム シ 類	(発生の特徴) ○主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ ○被害は厳寒期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することがある。 ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○作付予定地では予め除草し前作も早急に処分する。 ○被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。 ○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。	発生前	1B 3A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤	1:ダイアジン 1:テフルリン	6kg/10a 4kg/10a	は種時又は定植時 は種前	1回 1回	普 劇	×	○全面土壌混和 ○全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15)
ア オ ム シ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春～初夏及び10～11月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防止する。 ○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。	発生前	4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○株元散布
発生初期	3A		アグロスリン乳剤	1:シペルトリン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○合ピレ(注)(本冊P.15)			
	6		アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※				
	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	2,500～5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△				
	5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△				
28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	4,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△					
			BT剤(本冊)参照									○0.2ℓ/㎡株元灌注、登録は非結球アブラナ科葉菜類	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
キスジノミハムシ	○暖冬の後発生しやすいので、春先の成虫の発生に注意する。	○アブラナ科野菜の連作を避ける。 ○周辺のアブラナ科雑草の除草を徹底する。 ○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ダイアジノン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○全面土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○全面土壌混和 合ビレ注意事項(P.15)参照 ○土壌混和 ○土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	
				3A		フォース粒剤	1:テフルトリン	4kg/10a	は種前	1回	劇	×	
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	定植時	1回	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	定植時	1回	普	△	
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト	4,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×					
ハモグリバエ類	○ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である。 ○被害を受けた収穫残さは発生源となるので適切に処分する。	○ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:チアトキサム	6kg/10a	定植時	1回	普	×	○作条混和 ○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				発生初期	17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	
			5			スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500~5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
			5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
6+15		アフアームエクセラ顆粒水和剤	1:エマクチン安息香酸塩2:ルフェスロン	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※					
マメハモグリバエ				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
アザミウマ類	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である。 ○ハウス栽培では、開口部近くに青色粘着資材を設置すると、成虫の侵入抑制に有効である。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である。	生育期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500~5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
苗立枯病(リゾク)	(発生の特徴) ○菌核の形で土壤中に残存し作物が播種されると適当な温度と土壤水分で活動をはじめ、地際部の胚軸を侵す。	○土壤中に未分解の有機物があると病原菌が増殖して多発しやすいので、腐熟するのを待って播種する。	発生前		14 11+4 M4	リゾレックス水和剤 ユニフォーム粒剤 オーソサイド水和剤80	1:トルコホスメチル 1:アゾキシストロピン2:メタラキシルM 1:キャプタン	1,000倍 9~18kg/10a 800倍	は種時及び子葉展開時 は種前 は種後から2~3葉期まで	2回以内 1回 2回以内	普 普 普	△ △ ×	○植穴土壤灌注(1ℓ/㎡)150mℓ/穴 ○全面土壤混和 ○2ℓ/㎡灌注
葉枯細菌病	(発生の特徴) ○春から梅雨期までの生育初期から収穫期に発生し、梅雨明け以降の収穫期には発生は少ない。	○発病葉が土壤中に残り第1次伝染源となる。	発生初期		24+M1 24+M1	カスミンボルドー 銅ペーパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅 1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍 1,000倍	収穫開始7日前まで 収穫開始7日前まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △	
葉すす病	(発生の特徴) ○第1次伝染源は発病葉で、分生子の飛散により伝搬する。病原菌の生育適温は28℃。	○発病葉は早めに適用し、圃場に残さない。	発生初期		1 M5 1 11	トップジンM水和剤 ダコニール1000 ベンレート水和剤 ファンタジスタ顆粒水和剤	1:チオファネートメチル 1:TPN 1:ベンゾル 1:ピリベンカルブ	1,500倍 1,000倍 3,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 5回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普	△ × △ △	○薬剤選択注意 ○薬剤選択注意
うどんこ病	(発生の特徴) ○収穫期に雨が多い年に発生が増加する。	○被害残さをほ場内に残さないようにする。 ○窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。	発生初期	un	M10 3 11 7	モレスタン水和剤 トリフミン水和剤 アミスター20フロアブル アフェットフロアブル	1:キネキサン系 1:トリフルミゾール 1:アゾキシストロピン 1:ベンチオピラト	3,000倍 5,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普	△ △ △ △	
疫病	(発生の特徴) ○罹病残さが伝染源。連続降雨で多発。生育適温30℃。	○高畝にして排水をよくする。罹病株を除去する。	発生初期		11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロピン2:メタラキシルM	9kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	△	○株元散布
黒斑病	(発生の特徴) ○病原菌は空気中に浮遊する常在菌である。	○収穫後長時間高温多湿条件下に放置しない。雨の日の収穫は避ける。	初発期		2 3	ロブラール水和剤 トリフミン水和剤	1:イプロジオン 1:トリフルミゾール	2,000倍 5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	△ △	
病灰色かび	(発生の特徴) ○低温(20℃以下)多湿条件下で発生が多い。	○密植を避け風通しを良くする。	発生初期		2 7 11	ロブラール水和剤 アフェットフロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤	1:イプロジオン 1:ベンチオピラト 1:ピリベンカルブ	2,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内	普 普 普	△ △ △	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○発生の主体はワタアブラムシ、稀にモモアカアブラムシ、ハスクビレアブラムシが発生することがある。	○圃場周辺にソルゴーなどの障壁作物を植えることで天敵昆虫の発生も期待できる。	発生初期		3A 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 9B 29	アディオン乳剤 トレボン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 チェス顆粒水和剤 ウララDF	1:ベルトリン 1:エトフェンプロックス 1:アセタミプリド 1:クロチアニジン 1:チアトキサム 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ピエトロジン 1:フロニカト	2,000倍 1,000倍 4,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000倍 9kg/10a 9kg/10a 6,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 生育期 但し、収穫開始14日前まで 生育期 但し、収穫開始14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内 1回 1回 3回以内 3回以内	普 普 劇 普 普 普 普 普 普 普 普 普	× × △ △ △ △ △ △ △ △ ○ ○	○合ピレ(注)(本冊P.15) ○合ピレ(注)(本冊P.15) ○株元散布 ○株元散布
													気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
ハスモンヨトウ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。	発生初期	15 18 28 13 un 30		アタプロン乳剤 マトリックフロアブル フェニックス顆粒水和剤 コテツフロアブル プレオフロアブル グレーシア乳剤 BT剤の項(本冊)参照	1:クロルフルアズロン 1:クロマフェナシト' 1:フルベンシジアミト' 1:クロルフェナピル 1:ピリタリル 1:フルキサメタミト' 	2,000倍 2,000倍 2,000~4,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 普 普	△ ○ △ △※ △ △	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
オオタバコガ		○孔の開いた果実は早期に摘果し、果実内に食入している幼虫を捕殺してから処分する。	発生初期	15 13 6 un 30 28		アタプロン乳剤 コテツフロアブル アフアーム乳剤 プレオフロアブル グレーシア乳剤 ブレバソソフロアブル5 BT剤の項(本冊)参照	1:クロルフルアズロン 1:クロルフェナピル 1:エマメクチン安息香酸塩 1:ピリタリル 1:フルキサメタミト' 1:クロラントラニプロール	2,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	4回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普	△ △※ △※ △ △ △	○ IGR剤(注)(本冊P.15)参照
カメムシ類			発生初期	3A 3A		アディオン乳剤 トレボン乳剤	1:ペルトリン 1:エトフェンプロックス	2,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 3回以内	普 普	× ×	○合ピレ(注)(本冊P.15) ○合ピレ(注)(本冊P.15)
ハダニ類			発生初期	un	M10	モレスタン水和剤 気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照	1:キキサリ系	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
アザミウマ類		○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。	発生初期			生物農薬の項(本冊)参照							
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○萌芽初期に茎の地際を食害する。	○被害株の株元を掘り起こし幼虫を捕殺する。 ○高畝にして移動を防ぐ。	発生前	1B 3A		ダイアジノン粒剤5 ガードバイトA	1:ダイアジノン 1:ペルトリン	6kg/10a 3kg/10a	収穫開始30日前まで は種時～生育初期	2回以内 3回以内	普 普	× ○※	○全面散布 ○合ピレ(注)(本冊P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
萎凋病	(発生の特徴) ○被害株の残渣が次作への 伝染源となる。	○発病圃場では連作しない。	発生前			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
炭疽病	(発生の特徴) ○発病適温は23℃程度で、 多湿時に発生しやすい。	○発病圃場では連作しない。	発生初期		11 11 11	ストロビーフロアブル アミスター20フロアブル スクレアフロアブル	1:クロキシムメチル 1:アゾキシストロビン 1:マンデ'ストロビン	3,000倍 2,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普	△ △ ○	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○発生の主体はワタアブラ ムシ、モモアカアブラムシ。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A 4A 4A		アクタラ粒剤5 ダントツ粒剤 ベストガード粒剤	1:チアトキサム 1:クロチアニジン 1:ニテンピラム	6kg/10a 6kg/10a 9kg/10a	は種時 は種時 定植時	1回 1回 1回	普 普 普	× △ △	○作条混和 ○植溝処理土壌混和 ○植溝処理土壌混和
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤 ベストガード粒剤	1:アセタミプリト 1:ニテンピラム	8,000倍 9kg/10a	収穫3日前まで 収穫3日前まで	2回以内 1回	劇 普	△ △	○生育期株元処理
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:フロニカト	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
ウハスモンヨト	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○施設栽培では、開口部を 防虫ネット等で被覆する。 ○卵塊や分散前の幼虫集団 を寄生葉ごと摘除し処分する。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				5 un		ディアナSC プレオフロアブル	1:スピネトラム 1:ピリタリル	2,500~5,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
トシロイチモジヨ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。		発生初期	6		アフーム乳剤 BT剤の項(本冊)参照	1:エマメクシン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
シヨトウム	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。		発生初期	15		カスケード乳剤 BT剤の項(本冊)参照	1:フルフェノクスロン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
コナジラミ類		○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	9kg/10a	定植時	1回	普	△	○植溝処理土壌混和
			発生初期	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	9kg/10a	収穫3日前まで	1回	普	△	○生育期株元処理

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ハモグリバエ類	○被害を受けた収穫残渣は発生源となるので適切に処理する。		発生前	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○植溝土壌混和 ○植溝土壌混和 ○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	9kg/10a	は種時	1回	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	9kg/10a	は種時	1回	普	△	
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	9kg/10a	定植時	1回	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	9kg/10a	定植時	1回	普	△	
			発生初期	17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
マメハモグリバエ			発生前	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	9kg/10a	定植時	1回	普	△	○植溝処理土壌混和
				初発期	4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	9kg/10a	収穫3日前まで	1回	普	△
			15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		
マア類 ザミウ	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。		発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
シネキリム	○周辺雑草は発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。		発生前	1B		カルホス微粒剤F	1:イキシチオン	6kg/10a	定植時	1回	劇	△	○作条処理土壌混和 ○合ピレ(注)(本冊P.15)
				3A		ガードベイトA	1:ベルメリン	3kg/10a	生育初期	2回以内	普	○※	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
病萎黄			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照										
根こぶ病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。 ○本菌の生存期間は約5~7年、水中では約2年間。	○多発圃場での作付を避ける。 ○石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	発生初期		36 36 29 21 21	ネビジン粉剤 ネビジン粉剤 フロンサイド粉剤 オラクル顆粒水和剤 オラクル粉剤	1:フルスルフアミド 1:フルスルフアミド 1:フルアシナム 1:アミスブルロム 1:アミスブルロム	20~30kg/10a 20kg/10a 30kg/10a 200~300g/10a 20~30kg/10a	は種又は定植前 は種又は定植前 は種前 は種前又は定植前 は種前又は定植前	1回 1回 1回 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普	○※ ○※ △※ △※ ○※	○全面土壌混和 ○作条土壌混和 ○全面土壌混和 ○100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 ○全面土壌混和
白さび病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。	○湿地を避け排水を良くする。 ○発病葉を除去し、適正に処理する。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。	発生初期		11+4 21 21 11 U17	ユニフォーム粒剤 ランマンフロアブル ライメイフロアブル アミスター20フロアブル ピシロックフロアブル	1:アゾキシストロビン2:メタラキシルM 1:シゾファイト 1:アミスブルロム 1:アゾキシストロビン 1:ピカルブトキサ	9kg/10a 2,000倍 2,000~4000倍 2,000倍 1,000倍	は種前 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 3回以内 3回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 普 普	△ △ △ △ ○	○全面土壌混和
アブラムシ類	(発生の特徴) ○モモアカアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが発生する。 ○モモアカアブラムシは春、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○シルバーボリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前 発生初期	1B 4A 4A 4A 4A 4A 3A 4A 4A 4A 4A 4C	オルトラン粒剤 モスピラン粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アクタラ粒剤5 ダントツ粒剤 アグロスリン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 トランスフォームフロアブル 気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照	1:アセフェート 1:アセタミプリド 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:チアトキサム 1:クロチアエジン 1:シベルメトリン 1:アセタミプリド 1:チアトキサム 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:クロチアエジン 1:スルホキサフル	6kg/10a 3kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 2,000倍 4,000倍 2,000倍 3,000倍 3,000倍 2,000~4000倍 2,000倍	は種前 は種時 は種時 は種時 は種時 は種時 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	1回 1回 1回 1回 1回 1回 2回以内 1回 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内 3回以内	普 普 普 普 普 普 劇 劇 普 普 普 普 普	○ △ △ △ △ △ × △ △ △ △ △ ○	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○作条混和 ○播溝処理土壌混和 ○合ピレ(注)(本冊P.15)	
アオムシ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春~初夏及び10~11月に被害が多い。	○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。	発生初期		13 15 5 5	コテツフロアブル カスケード乳剤 ディアナSC スピノエース顆粒水和剤 BT剤の項(本冊)参照	1:クロルフェナピル 1:フルフェノクスロン 1:スピノトラム 1:スピノサド	2,000倍 2,000倍 2,500~5,000倍 2,500~5,000倍	収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫14日前まで	1回 2回以内 2回以内 2回以内	劇 普 普 普	△※ △ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
コナガ	(発生の特徴) ○春~初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。	○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。 ○施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。	発生前 発生初期	4A 6 15 13 5 5 un 22B	モスピラン粒剤 アフーム乳剤 カスケード乳剤 コテツフロアブル スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC プレオフロアブル アクセルフロアブル BT剤の項(本冊)参照	1:アセタミプリド 1:エマクテン安息香酸塩 1:フルフェノクスロン 1:クロルフェナピル 1:スピノサド 1:スピノトラム 1:ピリタリル 1:メタフルミジン	3kg/10a 2,000倍 2,000倍 2,000倍 2,500~5,000倍 2,500~5,000倍 1,000倍 1,000倍	は種時 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 2回以内 2回以内 1回 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 劇 普 普 普 普	△ △※ △※ △ △ △ △ ○	○播溝土壌混和 ○IGR剤(注)(本冊P.15)参照	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ヨトウムシ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。		発生初期	18 5 5		マトリックフロアブル スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC	1:クロマフェノジド 1:スピノサト 1:スピネトラム	2,000倍 2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普	○ △ △	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
			発生初期	5 5		スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC	1:スピノサト 1:スピネトラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500～5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
メイガダラノ	(発生の特徴) ○夏期の高温少雨で多発する。 ○幼虫は生長点付近を食害する。	○育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	5 5		スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC	1:スピノサト 1:スピネトラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
エハ類 モグリバ		○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。	発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト	2,500～5,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
マメハモグリバエ			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
マアザミウ		○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場周辺を除草する。	発生初期	5 5		スピノエース顆粒水和剤 ディアナSC	1:スピノサト 1:スピネトラム	2,500～5,000倍 2,500～5,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内	普 普	△ △	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○地際を食害する。	○被害株の株元を掘り起こし幼虫を捕殺する。	発生前	1B 3A		ダイアジノン粒剤5 フォース粒剤	1:ダイアジノン 1:テフルリン	6kg/10a 4kg/10a	は種時又は定植時 は種前	1回 1回	普 劇	×	○全面土壌混和 ○全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15)
			発生初期	4A 4A 4A 22B		ダイアジノン粒剤5 フォース粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アクセルフロアブル	1:ダイアジノン 1:テフルリン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:メタフルミゾン	6kg/10a 4kg/10a 6kg/10a 6kg/10a 2,000倍 2,000倍 1,000倍	は種時 は種前 は種時 は種時 収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	1回 1回 1回 1回 2回以内 2回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普	×	○全面土壌混和 ○全面土壌混和 合ピレ(注)(本冊P.15) ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和
センチュウ類						土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							

[16]なばな類

なばな

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
黒腐病	(発生の特徴) ○秋雨時や台風通過後に多発しやすい。 (防除上のポイント) ○食害は病原細菌の侵入口になるので、食葉性害虫は早めに防除する。	○アブラナ科作物の連作を避ける。 ○低湿地を避け、排水を良くする。	発生初期		24+M1	カスミンボルドー	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					24+M1	銅ペーパーシン水和剤	1:カスカマイシン2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
黒斑病	(防除上のポイント) ○下葉から発生するため予防散布を徹底する。	○アブラナ科作物の連作を避ける。 ○排水を良くする。 ○肥切れしないように注意する。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×	
白斑病	(防除上のポイント) ○下葉から発生するため予防散布を徹底する。	○アブラナ科作物の連作を避ける。 ○排水を良くする。 ○肥切れしないように注意する。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×	
白さび病	(発生の特徴) ○冷涼で降雨が続くときに多発する。	○湿地を避け排水を良くする。 ○発病葉を除去し、適正に処理する。 ○窒素肥料の偏用を避ける。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×	
					11 U17	ストロビーフロアブル ピシロックフロアブル	1:クソキシムメチル 1:ピカルブトラゾクス	3,000~4,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△ ○	
べと病	(発生の特徴) ○20~24℃が発病適温で、多湿条件で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が低下した時に多発しやすい。	○肥培管理に注意し、収穫期まで肥切れしないようにする。 ○密植を避け、通風を良くする。	発生初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	3回以内	普	×	
根こぶ病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。 ○休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○本菌の生存期間は約5~7年、水中では約2年間。	○多発圃場での作付を避ける。 ○発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	発生前		29	フロンサイド粉剤	1:フルアジナム	15~20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○作条土壌混和 ○全面土壌混和 ○作条土壌混和 ○全面土壌混和 ○100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 ○使用方法(注)(本冊P.27)
					29	フロンサイド粉剤	1:フルアジナム	30~40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	
					36	ネビジン粉剤	1:フルスルファミド*	20kg/10a	定植前	1回	普	○※	
					36	ネビジン粉剤	1:フルスルファミド*	20~30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	
					21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスルプロム	200~300g/10a	は種前又は定植前	2回以内	普	△※	
					21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスルプロム	200~500倍	定植前	1回	普	△※	
		21	オラクル粉剤	1:アミスルプロム	20~30kg/10a	は種前又は定植前	2回以内	普	○※				
アブラムシ類	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。		時定植	1B		オルトラン粒剤	1:アセフェート	6kg/10a	定植時	1回	普	○	○播溝土壌混和
			時は種	1B		オルトラン粒剤	1:アセフェート	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○播溝土壌混和
			発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○植穴処理土壌混和 ○使用方法(注)(本冊P.27)
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	
			発生初期	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1~2g/株	定植時	1回	普	△	
	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△				
アオムシ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春~初夏及び10~11月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。		前発生	28+4A		ジュリボフロアブル	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム	200倍	育苗期後半~定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(本冊P.27)
			発生初期	6		アフアーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○0.2ℓ/m ² 株元灌注 ○0.2ℓ/m ² 株元灌注
		28		ベリマークSC	1:シアントラニプロール	4,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△			
		30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタド*	3,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△			
					BT剤の項(本冊)参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
コナガ	(発生の特徴) ○春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。	○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分の実施、また、発生放任圃場を作らない。	発生初期	5 6 14 15 28 un 30		ディアナSC アフーム乳剤 パダンSG水溶剤 ノーモルト乳剤 ベリマークSC プレオフロアブル グレーシア乳剤 BT剤の項(本冊)参照	1:スピネトラム 1:エマクチン安息香酸塩 1:カルタップ 1:テフルベンズロン 1:シアントラニプロール 1:ピリタリル 1:フルキサメタム*	2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 1,500倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍 3,000倍	収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫14日前まで 収穫7日前まで	2回以内 2回以内 3回以内 1回 1回 2回以内 1回	普 普 劇 普 普 普 普	△ △※ × △ △ △ △	○合ピレ(注)(本冊P.15) ○0.20/㎡株元灌注
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。	前発生 発生初期	28+4A 5 6 13 un 28		ジュリボフロアブル ディアナSC アフーム乳剤 コテツフロアブル プレオフロアブル プレバソフロアブル5 BT剤の項(本冊)参照	1:クロラントラニプロール2:チアトキサム 1:スピネトラム 1:エマクチン安息香酸塩 1:クロルフェニル 1:ピリタリル 1:クロラントラニプロール	200倍 2,500～5,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	育苗期後半～定植当日 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫3日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	1回 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 3回以内	普 普 普 劇 普 普	△ △ △※ △※ △ △	○使用方法(注)(本冊P.27)
ムヨシトウ	(発生の特徴) ○年2回発生、5月、10月に被害が多い。		初発生	15 6 3A		カスケード乳剤 アフーム乳剤 スカウトフロアブル	1:フルフェノクスロン 1:エマクチン安息香酸塩 1:トラロトリン	2,000～4,000倍 1,000～2,000倍 2,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	3回以内 2回以内 2回以内	普 普 劇	△ △※ △※	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○合ピレ(注)(本冊P.15)
メイイガマダラノ	(発生の特徴) ○別名(ダイコンシンクイムシ) ○夏期の高温少雨で多発す ○7～10月に発生が多くなる。 ○幼虫は生長点付近を食害する。	○被害を受けた収穫残さは発生源となるので適切に処分する。	発生初期	6		アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
ハモグリバエ類			初発生	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000～4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ハクシジノミ	(発生の特徴) ○暖冬の後発生しやすいので、春先の成虫の発生に注意する。	○アブラナ科野菜の連作を避ける。 ○周辺のアブラナ科雑草の除草を徹底する。	前発生 初発生	3A 4A		フォース粒剤 モスピラン顆粒水溶剤	1:テフルトリン 1:アセタミプリト*	4kg/10a 4,000倍	は種前 収穫14日前まで	1回 1回	劇 劇	× △	○全面土壌混和合ピレ(注)(本冊P.15)
シコ類ガ幼ネム		○周辺の寄生植物を除去する。 ○必要以上に有機物を施用しない。	発生前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○全面土壌混和
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。 (留意点) ○粒剤を使用した場合は間引菜を利用しない。	○作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。	発生前	1B 1B 3A		ダイアジン粒剤5 ネキリエースK ガードバエトA 土壌病害虫防除法の項(本冊)参照	1:ダイアジン 1:イキサチオン 1:ベルトリン	6kg/10a 3kg/10a 3kg/10a	は種時 発芽期まで 生育初期	1回 1回 3回以内	普 普 普	× △ ○※	○全面土壌混和 ○土壌表面株元処理 ○株元散布合ピレ(注)(本冊P.15)
イハクニサ	(発生の特徴) ○休眠卵が土中などで越冬し、11～4月頃活動する。	○収穫残さや雑草に残された卵が次の発生源となるので、適切に処分する。	初発生	5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ケラ		○土壌の乾燥を図る。 ○未熟堆肥の施用を避ける。	発生前	1B		ダイアジン粒剤5	1:ダイアジン	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○全面土壌混和
センチュウ類						土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
根こぶ病	(発生の特徴) ○だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○本菌の生存期間は約5~7年、水中では約2年間。	○多発圃場での作付を避ける。 ○石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	発生前		36	ネビジン粉剤	1:フルスファミド	20~30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○全面土壌混和
					36	ネビジン粉剤	1:フルスファミド	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○作条土壌混和
					29	フロンサイド粉剤	1:フルアジナム	30kg/10a	は種前	1回	普	△※	○全面土壌混和
					21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスルプロム	200~300g/10a	は種前又は定植前	2回以内	普	△※	○100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和
白さび病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。	○湿地を避け排水を良くする。 ○発病葉を除去し、適正に処理する。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。	は定種 植前又		11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロピン2:メタラキシルM	9kg/10a	は種前又は定植前	1回	普	△	○全面土壌混和
			発生初期		21	ランマンフロアブル	1:シゾファミド	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:アミスルプロム	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11 U17	アミスター20フロアブル ピシロックフロアブル	1:アゾキシストロピン 1:ピカルフトラゾクス	2,000倍 1,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内	普 普	△ ○	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○モモアカアブラムシ、ニセダイコンアブラムシが発生する。 ○モモアカアブラムシは春、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○シルバーボリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生初期	4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝処理土壌混和
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イダクロプリド	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアトキサム	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
												気門封鎖型薬剤の項(本冊)参照	
アオムシ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春~初夏及び10~11月に被害が多い。		初発生	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				3A		アディオン乳剤	1:ベルメリン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○合ピレ(注)(本冊P.15)
				6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
コナガ	(発生の特徴) ○春~初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。	○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。	発生初期	4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				un		プレオフロアブル	1:ピリタリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	5,000倍	収穫3日前まで	1回	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				22B		アグセルフロアブル	1:メタフルミジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
												BT剤(参考資料)、生物農薬の項(本冊)参照	
シヨトウム	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。		発生初期	18		マトリックフロアブル	1:クロマフェジド	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
				6		アフアーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000~2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○登録はヨトウムシ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード*	FRAC コード*	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒 水産 (注)	注意事項	
ノ ハ イ マ イ ガ ダ ラ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除する。	○被害を受けた収穫残渣は 発生源となるので適切に 処理する。	発 生 初 期	6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
エ ハ 類 モ グ リ バ			発 生 初 期	6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
マ メ ハ モ グ リ バ エ			発 生 初 期	15		カスケード乳剤	1:フルフェナクスロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(本冊P.15)参照
ア ザ ミ ウ マ		○雑草にも寄生し発生源と なるので、圃場周辺を 除草する。	発 生 初 期	6		アファーム乳剤 生物農薬の項(本冊)参照	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
ウ セ ン チ ユ			発 生 前			土壌病害虫防除法の項(本冊)参照							
ネ キ リ ム シ 類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ ○ 地際を食害する。	○ 被害株の株元を掘り起こし 幼虫を捕殺する。 ○ 高畝にして移動を防ぐ。	発 生 前	1B 3A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤 土壌病害虫防除法の項(本冊P.302)参照	1:ダイアジン 1:テフルリン	6kg/10a 4kg/10a	は種時又は定植時 は種前	1回 1回	普 劇	×	○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和
キ ス ジ ノ ミ ハ ム シ	(発生の特徴) ○ 成虫は5月から10月にかけて 数回発生する。 ○ 夏季が高温少雨であると発生 が多い。 ○ 成虫で越冬する。	○ 圃場周辺の除草を徹底す る。	発 生 前	1B 3A 4A 4A		ダイアジン粒剤5 フォース粒剤 アルバリン粒剤 スタークル粒剤	1:ダイアジン 1:テフルリン 1:ジノテフラン 1:ジノテフラン	6kg/10a 4kg/10a 6kg/10a 6kg/10a	は種時又は定植時 は種前 は種時 は種時	1回 1回 1回 1回	普 劇 普 普	×	○ 全面土壌混和 ○ 全面土壌混和 ○ 播溝土壌混和 ○ 播溝土壌混和
発 生 初 期			4A 4A 4A 22B		アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 モスピラン顆粒水溶剤 アクセルフロアブル	1:ジノテフラン 1:ジノテフラン 1:アセタミプリト 1:メタフルミジン	2,000倍 2,000倍 4,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫3日前まで 収穫7日前まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 1回 3回以内	普 普 劇 普	△ △ △ ○		
ム ヤ シ イ ゾ ウ	(発生の特徴) ○ 食害痕は円形で、加害は10 月ごろから翌5月ごろまで見 られる。	○ 圃場周辺の除草を徹底す る。	発 生 初 期	3A		アディオソ乳剤	1:ベルマトリン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(本冊P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
根こぶ病	(発生の特徴) ○だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○本菌の生存期間は約5~7年、水中では約2年間。	○多発圃場での作付を避ける。 ○石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。 ○前作でフルスルファミドを使用した圃場などではおとり植物の根毛感染が抑制されるため併用しない。	発生前		M5	ダコソイル	1:TPN	20~40kg/10a	は種前	1回	普	×	○作条施用土壌混和 ○100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 ○全面土壌混和 ○全面土壌混和 ○作条土壌混和 ○全面土壌混和 ○全面土壌混和
					21	オラクル顆粒水和剤	1:アミスブルーム	150~300g/10a	は種前	2回以内	普	△※	
					21	オラクル粉剤	1:アミスブルーム	30kg/10a	は種前	2回以内	普	○※	
					29	フロンサイド粉剤	1:フルアシナム	30~40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	
					36	ネビジン粉剤	1:フルスルファミド'	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	
					36	ネビジン粉剤	1:フルスルファミド'	30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	
白さび病	(発生の特徴) ○アブラナ科作物で発病する。	○湿地を避け排水を良くする。 ○発病葉を除去し、適正に処理する。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。	前発		11+4	ユニフォーム粒剤	1:アゾキシストロビン2:メタラキシルM	9kg/10a	は種前	1回	普	△	○全面土壌混和
			初発期		11	アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
べと病	(発生の特徴) ○秋季や春季、低温多湿で発病する。	○発病作物の連作を避ける。 ○排水を良好にする。 ○窒素質肥料の偏用を避ける。	初発期		21	ランマンフロアブル	1:シゾフアミド'	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
キスジノミハムシ	(発生の特徴) ○成虫は5月から10月にかけて数回発生する。 ○夏季が高温少雨であると発生が多い。 ○成虫で越冬する。	○圃場周辺の除草を徹底する。	発生前	4A	アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 IGR剤(注)(本冊P.15)参照 ○は種時:作条散布 作物生育中:株元散布 ○かぶれ・目の刺激注意	
				4A	スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△		
				3A	フォース粒剤	1:テフトリン	4kg/10a	は種時	1回	劇	×		
			発生初期	1B	ダイアジノン粒剤5	1:ダイアジノン	6kg/10a	収穫45日前まで	2回以内	普	×		
				4A	モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト'	2,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△		
				4A	スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
				4A	アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
				30	プロフレアSC	1:プロフレア'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
30	グレーシア乳剤	1:フルキサメタミト'	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△						
21A	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト'	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×						
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○土壌施用粒剤は残効性が長くウイルス病防除によい。	○雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A	アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○播溝土壌混和 ○播溝土壌混和 ○播溝処理土壌混和 ○株元散布 ○株元散布 ○かぶれ・目の刺激注意	
				4A	スタークル粒剤	1:ジノテフラン	6kg/10a	は種時	1回	普	△		
				4A	ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	6kg/10a	は種時	1回	普	△		
			発生初期	1B	オルトラン粒剤	1:アセフェート	4kg/10a	収穫21日前まで	1回	普	○		
				1B	ジェイエース粒剤	1:アセフェート	4kg/10a	収穫21日前まで	1回	普	○		
				4A	モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリト'	2,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△		
				4A	アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
				4A	スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	3000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△		
4A	ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△						
21A	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト'	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×						
アオムシ	(発生の特徴) ○標準名称(モンシロチョウ) ○春~初夏及び10~11月に被害が多い。		発生初期	5	ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				30	プロフレアSC	1:プロフレア'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
コナガ	(発生の特徴) ○春~初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。	○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。	発生初期	6	アフーム乳剤	1:エマクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※	○かぶれ・目の刺激注意	
				21A	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト'	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×		
				5	ディアナSC	1:スピネトラム	2,500~5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△		
				30	プロフレアSC	1:プロフレア'	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△		
				30	グレーシア乳剤	1:フルキサメタミト'	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△		

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード'	FRAC コード'	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
メイイ ガマ ダ ラ ノ	(発生の特徴) ○別名:ダイコンシンクイムシ。 ○7月～10月に発生が多くなる。 ○高温少雨で多発する。 ○幼苗期に生長点付近を食害する。	○幼苗期は防虫網(2mm目程度以下)やべたがけ資材を使った物理的防除対策が有効である。	発生初期	21A 28 30	39	ハチハチ乳剤 フェニックス顆粒水和剤 プロフレアSC BT剤の項(本冊)参照	1:トルフェンピラト' 1:フルベシジアミド' 1:プロフラニト'	2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで	1回 2回以内 3回以内	劇 普 普	× △ △	○かぶれ・目の刺激注意
チカ ブラ ハ バ	(発生の特徴) ○風通しが悪かったり、茂りすぎのところで多発する。	○幼虫を捕殺する。 ○密植を避け、通風を良くし、健全な株にする。 ○周辺のアブラナ科雑草を除草する。	発生初期	1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
エハ 類 モ グ リ バ	(発生の特徴) ○4～11月に発生し、蛹や成虫で越冬する。	○圃場周辺の除草を徹底する。	発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサト'	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
ナモ グ リ バ エ			発生初期	21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラト'	2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	○かぶれ・目の刺激注意
類 ネ キ リ ム シ		○周辺雑草は発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生初期	1B		オルトラン粒剤	1:アセフェート	4kg/10a	収穫21日前まで	1回	普	○	○株元散布

農薬の適正使用と危害防止について

- 農薬は、ラベルに表示されている記載事項を十分に確認し、適正に使用しましょう。
- 農薬散布後は、防除器具を十分に洗浄しましょう。
- 農薬を悪用されないように、毒物及び劇物の販売・保管管理に注意しましょう。
- ラベルに農薬登録番号がないにもかかわらず、農薬の効果を謳った資材や、使用すると病害虫に効果がある資材は、無登録農薬の疑いがあるので注意しましょう。
- 農薬飛散の懸念のある場合は、被覆などの防護対策、周辺にも登録のある農薬の選定、飛散の少ない粒剤への切り替え等の対策を実施しましょう。
- 特に住宅地周辺での農薬使用は注意をはらい、事前通知の実施等、周辺住民に対して十分配慮しましょう。

農林水産省：住宅地等における農薬使用について

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

本指針に掲載した農薬は、原則として「令和6年12月11日現在」の農薬登録に基づいて作成しました。

実際の指導に当たっては登録内容が変更されている場合がありますので、必ず下記のHP等で常に最新の情報を確認してください。

また、農薬使用者に対しては、農薬を実際に使用する際には、**農薬ラベル**の表示事項（使用方法、注意事項等）を確認し、遵守するよう指導してください。



○農林水産省ホームページ

「農薬登録情報提供システム」最新の農薬登録情報

(<https://pesticide.maff.go.jp/>)

○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

(<https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>)

○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」

県内における農薬の適正使用への取り組み等

(<https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html>)

愛媛県 農薬適正使用

検索

○病害虫防除所ホームページ

病害虫発生予察情報等

(<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/>)

愛媛県病害虫防除所

検索